梅園三語　玄語　第二冊

天冊活部

安永四年本準拠

玄語（げんご）

天冊（てんさつ）　活部天神（かつぶてんしん）

道徳（どうとく）　有徳は勢（せい）に走（はし）りて之（これ）を成（せい）す　並（なら）びに圖（ず）

天神（てんしん）　居宅は路（ろ）に上（のぼ）りて之（これ）を成（せい）す　並（なら）びに圖（ず）

事物（じぶつ）　物没（ぶつぼつ）し氣露（きろ）して之（これ）を成（せい）す　並（なら）びに圖（ず）

天命（てんめい）　體隠（たいかく）れ性見（せいあらわ）れて之（これ）を成（せい）す　並（なら）びに圖（ず）

玄語

日本　鎮西　三浦晉　安貞　著

天冊　活部天神

道徳　徳

一一四一ー四二　一は二を有す、故に芒芴の間、窱うが如し、而して能く淳淳として萬開を有す者は、徳なり、

一一四三ー四四　二は一を開く、故に鬱涌の中、得る有り、而して能く歴歴として一有を開く者は、道なり、

一一四五　故に。徳なる者は、天なり、一の有なり、貌跡は自ら成る、

一一四六　道なる者は、神なり、二の開なり、機状を爲さ使む

一一四七　一を剖し二を對す、經の態なり、

一一四八　一は分れ一は合す、緯の態なり、

一一四九　徳に非ざれば、則ち萬開を混有して、罅縫を没すること能わず、

一一五〇　道に非ざれば、則ち一有を粲開して、條理を見わすこと能わず、故に。

一一五一　徳は、萬緯の得て宅を爲す所なり、

一一五二　道は、萬經の由て路を爲す所なり、是を以て。

一一五三　分れて分る、融せざる所莫し、一の偏なり、

一一五四　合して合す、通ぜざる所莫し、二の貫なり、蓋し。

一一五五　性體なる者は、氣物に託する者なり、

一一五六　氣物なる者は、性體を有する者なり、

(PA 151)

(I 399a)

一一五七　性體なる者は、性は活し體は立す、
一一五八　氣物なる者は、氣は没し物は露す、夫れ。
一一五九　活立は本と一なり、一なれば則ち交接を須いずして、而して己に於て足る、故に
一一六〇　精は奉じ力は立つ、
一一六一　靈は知り神は感ず、
一一六二　一體一用、機を以て造化す、
一一六三ー六四　氣立てば已に二なり、二なれば則ち交接を用いて、而して他に由る有り、故に
一一六五　性を活し體を立す、
一一六六　道を得て徳に由る、跡は天と命に成る、故に。
一一六七　本は以て物を幹す、
一一六八　神は以て活を運す、天は以て之を有す、
一一六九　神は以て之を發す、
一一七〇ー七八　（元筆復元によって生じた空白）
一一七九　神は徒なる能わず、本は體を物に於て立す、
一一八〇　物は死する能わず、神は性を氣に於て活す、
一一八一　徳は以て之を有す、
一一八二　道は以て之を開く、是を以て。
一一八三　有して之を行う、道徳の一なる所なり、

宅して之に路す　道徳の二なる所なり

道なる者は　神なり　是を以て。

本神に非ざれば　則ち二を混成して活立する能わず　活立せざれば　則ち物を神にする能わず

徳なる者は　天なり　是を以て。

天神に非ざれば　則ち一を粲立して剖對する能わず　剖對せざれば　則ち物を事にする能わず

剖するや條理を示す

對するや反比を并す

剖對は已まず　萬路は無窮なり

混合は已まず　一有は混然たり

故に本神は。大物に於ては　則ち大物を活立す

散小に於ては　則ち散小を活立す

精なる者は　有して遺さず

麁なる者は　融して一なり

一の徳は　有して遺さず　故に其の道や　開きて已まず

二の徳は　融して一なり　故に其の道や　通じて貫す

諸を一有に資りて　剖析は萬露す

諸を一活立に資りて　萬生は萬活立す

各物各性體

(PA 153)

一二〇七　各神相い發接す、
一二〇八　親なる者は反反混合して、相い得て一を成す、
*一二〇九　疏なる者は相い持し相い隔て、精神接せず、然りと雖も。
一二一〇―一二　之を條理に得て。其の歸する所に歸し。比類して相い合すれば。疏も猶お親のごときなり。　(I 399b)
一二一三　居は物を有す、
一二一四　行は事を有す、故に
一二一五　之を緯に置けば、則ち絪縕の用は、感應向背す、而して鬼神を見す、
*一二一六　之を經に置けば、則ち往來の活は、往來生化す、而して造化を示す、
*一二一七　宅なる者は、處なり、神は物を得て而して之に居る、
*一二一八　路なる者は、時なり、物は神を得て而して之に遊ぶ、
*一二一九　既已に之に居るは、居れば則ち其の有に非ざる靡し、
*一二二〇―二一　既已に之を行けば、行けば則ち其の道に非ざる靡し、是に於て。有開は德を爲す、
爲成は動を爲す、
一二二二　有する者の貌は、則ち自ら然る、其の狀は則ち跡を成す、
一二二三　開する者の貌は、則ち若く使む、其の狀は則ち機爲なり、
一二二四　德に就きて天と曰う、
一二二五　道に就きて神と曰う、
一二二六　天も亦た道を具す、
一二二七　(PA 154)

一二二八ー二九　神も亦た徳を具す、故に有開は則ち天神の徳なり、
一二三〇　爲成は則ち天神の道なり、
一二三一　故に天神は。則ち道徳の主名なり。
一二三二ー三三*　分れて各おの道徳を具す。会易の盡きざる所なり。
一二三四　合すれば則ち混然たり、
一二三五　分るれば則ち粲然たり、
一二三六　其の自を觀らんと欲すれば、則ち須らく其の故を觀て、其の理を繹ぬべし、
一二三七　其の使を知らんと欲すれば、則ち須らく其の勢を察し、其の力を審かにすべし、
一二三八　理なる者は昭昭なり、
一二三九　故なる者は冥冥なり、
一二四〇　勢は以て能く走る、
一二四一　力は以て能く持す、
一二四二ー四四　是を以て事物は。理を挑げて之を炤せば、毫厘も逃るる所無し、而して
一二四五ー四六　其の故を繹ぬれば、則ち其の跡を冥没す、
一二四七ー四八　神は以て己の分と爲さず。況んや人の聡明をや。
一二四九　若し自然を以て本然と爲さば、則ち孰れか之をして然ら使めん。
一二五〇　若し使然を以て本然と爲さば、則ち奚れか自然を容れん。
一二五一　使なる者は、神の貌なり、

一二五二　自なる者は、天の貌なり、

*一二五三－五四　有すれば則ち之を外にする者有ること能わず、有の有を知りて、而して無の無を知る、

*一二五五－五六　行なえば則ち之を遺す者有ること能わず、行の行を知りて、而して活の活を知る、

一二五七　天地は活物、故に死なず、

一二五八　天地は物有り、故に無ならず、

一二五九－六〇　有は則ち無に偶して而して有なり。是の故に。有なる者は則ち有り、

一二六一　無なる者は則ち無し、

一二六二－六三　夫れ才に能不能有り。以て相い偶す。

一二六四　是の故に。有なる者は則ち無なる能わず、

一二六五　無なる者は則ち有なる能わず、

一二六六　是を以て。具中は、則ち闕も、亦た之を具す、

*一二六七－六八　能中は、則ち不能も亦た之を能す、全の全たる所なり。

一二六九－七〇　而して其の散じて萬物を爲すに至りては。則ち性は物に随いて、而して一具一闕なり、

一二七一　才は運に随いて、而して一能一拙なり、

一二七二　是を以て。天に具する者は、地に闕くるなり、

一二七三－七四　易に能くする者は、会に拙きなり、是を以て。翅を具すれば則ち手を闕く、

一二七五　能く飛べば則ち潜むに拙し、

一二七六　諸を小に試みるに。亦た大と同じ。

(PA 155, I 400a)

一二七七ー七八　故に天融神通は。其の剖くる者よりして言うなり。
一二七九ー八一　噫　有の宅。芒芴恣うが如しと雖も。昭昭の理を以て之を示す、
一二八二　冥冥の故を以て之を没す、
一二八三　明を以て其の戸を開けば、則ち
一二八四　幽を以て其の室を閉ず、
一二八五ー八六　神の得て窺わざる所なり。人は豈に敢て之を視んや。
*一二八七ー八八　之を技に言わんに。譬えば囲棊の如し。未だ對して局を奩に依らざるの中。
一二八九　高下勝敗。千萬變化は。其の宅に有り。
*一二九〇　已に諸を宅に有すると雖も。然れども宅に歸して其の半を閉れば。
一二九一　神は運し機は動き。而して後　高下勝敗。千萬變化。始めて其に途に露す。
一二九二　是を以て。物成れば則ち各おの其の道徳を具す。
*一二九三ー九四　道徳　已に具すれば。則ち各おの其の宅を有し。其の路を有す。故に
一二九五　爲は、則ち各おの其の戸を開き　而して其の途に上る、
一二九六　成は、則ち各おの其の宅に歸し、而して其の室を閉ず、
一二九七　道なる者は經通す、此に走らざる能わず、
一二九八　宅なる者は緯塞す、此に容れざる能わず、故に
一二九九　往けば則ち來る者に當る、
一三〇〇　來れば則ち往く者に遇う、

彼の天徳を觀て、
此の天命に甘んず、
徳なる者は、其の有する所なり、
道なる者は、其の行く所なり、
天徳は自然にして、而して其の道や成なり、
神徳は使然にして、而して其の道や爲なり、故に
馬なる者は、遠くに行くを有す者なり、
牛なる者は、重きを負うを有す者なり、
馬なる者は、遠きに行くを行う者なり、
牛なる者は、重きを負うを行う者なり、乃ち牛馬の道徳なり。是の故に。
神と本は、則ち然るに幹運す、
天と神は、則ち然るに爲成す、
牛に走る、馬に走る、牛に持す、馬に持す、牛馬の勢力なり、
牛なる所、馬なる所、以て牛し、以て馬す、牛馬の故理なり、
没中に牛馬を有して、而して牛馬は露中に出づ、
此を以て之を推すに。天地の有する所は、則ち
萬物も有する有り、蓋し
神物の成る所は。則ち徳性の爲す所なり。

(PA 156)

一三二四　性なる者は、物を一にする者なり、
一三二五　物なる者は、體を二にする者なり、
一三二六　之を二にする者は、有して開く、
一三二七　之を一にする者は、則ち具して能す、
*一三二八　性才道徳の分るる所なり。
一三二九　居る者は宅す、故に之を徳と謂う、
一三三〇　行く者は路す、故に之を道と謂う、
*一三三一　故に徳は諸を事に行えば則ち道なり、
一三三二　道は諸を物に有せば則ち徳なり、是を以て。
一三三三　車は、旋轉を未だ旋轉せざるの中に有せば、
一三三四－三五　則ち機触れ勢走り、以て其の旋轉の事を其の物に於て行う、
一三三六　桔槔は、低昂を未だ低昂せざるの中に有せば、
一三三七－三八　則ち機触れ勢走り、以て其の低昂の事を其の物に於て行う、
一三三九　車と桔槔とは。人造なり。
一三四〇　旋轉低昂は、人造に非ざるなり。
一三四一　旋轉低昂を有し、以て
一三四二　旋轉低昂を行なうは、則ち其の器の道徳なり。
一三四三　旋轉低昂を具し、

（以てを欠くか。）

旋轉低昂を發するは、　規矩の性才なり。（則ちを欠くか。）

具するに由りて之を有す、
發するに由りて之を行う、
具を有し發を有するは則ち德なり、
之を具し之を發するは則ち神なり、
分ると雖も而も混成す。
聲音に就きて之を言うに。
發すれば　則ち聲は有外に行わる、
發せざれば則ち聲は閫中に有す、　是を以て。
一聲は音韻を未發に具す、
而して後發する者は聲中に能く音韻を具す、

（編集による空白）

蓋し理は其の一を一一にし。剖析は無窮なり。
故に爲成の具は相い絪縕し。萬物は此の如く擾擾たり。
萬物此の如く擾擾たれば。則ち道德も亦た之に從う。是を以て。
精は没し麁は露す、　天地は此の如し、
　天氣は動く、
地質は止る、

(PA 157)

一三四四
一三四五
一三四六
一三四七
一三四八
一三四九
一三五〇
一三五一
一三五二
一三五三
*一三五四
一三五五
一三五六
一三五七
一三五八ー五九
一三六〇
一三六一
一三六二

一三六三　動は能く象を率いて轉ず、
一三六四　止は能く物を載せて持す、
一三六五　地は端を天に於て寓す、
一三六六　天は中を地に於て寄す、
一三六七　天は中を守る、故に動きて靜す、
一三六八　地は端を奉ず、故に止りて動く、
一三六九　徒動は則ち圓無し、
一三七〇ー七一　徒靜は則ち直無し、故に。地は止ると雖も、而も雲雨は則ち止中に動く、
一三七二　天は動くと雖も、而も諸象は則ち動中に止る、
一三七三　勢は天をして圓轉せしむ、而れども猶お地の中に違わず、
一三七四　力は地をして直持せしむ、而れども猶お天の端に差わず、
一三七五　地は外に向いて天を載す、
一三七六　天は中に向いて地を裹む、
一三七七ー七八*　其の中間や。日月星宿の行る所なり。
一三七九　山壑河海の列ぶ所なり。
一三八〇　推遷轉持の成る所なり。
一三八一　風雨雷霆の旋る所なり。
一三八二　水火艸木の生化する所なり。

(I 401a)

一三八三　羽毛鱗介の出没する所なり。
一三八四ー八五　其の之を貫する者に至りては。則ち大小有無も。之を形にする能わず。
一三八六ー八七　智慮思索も。之に至る能わず。孰れか能く之を容れん。
一三八八　孰れか能く之に居らん。
一三八九　天は、其の象を目し、其の機を臆し、以て之を度る、
一三九〇　地は、其の質を摩り、其の體を踏み、以て之を知る、
一三九一ー九二　度れば則ち得て逃れざると雖も、而も之を窮むること能わず、
一三九三ー九四　知れば則ち以て數う可しと雖も、而も其の物を爲すを知るに病む、
一三九五*　今夫れ黒白の棊子。勝敗相い成る者は。諸を局に託すればなり。
一三九六　今氣物は何の中に物し、
一三九七　天神は何の中に事するや、
一三九八ー〇〇　空と曰い無と曰う、局を舍てて棊を譚ずるなり、妄に非ずして何ぞや、
一四〇一ー〇三　實と曰い有と曰う、氣物を除きて物を索るなり、僞に非ずして何ぞや、
一四〇四ー〇五　人の天地を觀るや。其れ猶お幕と席とを觀るがごときか。
一四〇六*　幕席に囿わるる者は。堂を知らざるなり。
一四〇七　天地に囿わるる者は。天地の以て然る所を知らず。
一四〇八　天地の以て然る所を知らざれば。則ち天地を知らざるなり。
一四〇九ー一〇　僞妄に駕して以て往く。辨は千人を屈すと雖も。通に於ては則ち未だなり。

一四一一　清濁隠見して、象質は此の如し、

一四一二―一三　日影なる者は虚體にして。明暗なる者を以て物を露す。

一四一四　明は定象有り　無體の天に託す、

一四一五　暗は定象無し　有質の地に依る、

一四一六　日なる者は昜象なり、

一四一七　影なる者は会氣なり、是に於て。

一四一八―一九　物の暗中に在る者は、象にして光なり、

一四二〇―二〇　物の明中に在る者は、質にして影なり、故に

一四二二　天象は能く明なり、

一四二三　地質は能く暗なり、

一四二四　如し明をして盡くす可からしめば、則ち暗は卽に絶えん、

一四二五　若し暗をして絶える可からしめば、則ち明は卽に盡きん、

一四二六―二七　蓋し明暗の相い追うや。明は則ち秋毫を折つ、

一四二八　暗は則ち江山を藏す、

一四二九　明暗なる者は、天地の氣なり、

一四三〇　睡覺なる者は、物の明暗に從うなり、

一四三一　唯だ諸動は意を具す。故に

一四三二　色を通ずるの竅を目に開く。故に

(I 401b)

一四三三ー三四　明暗なる者の氣は、睡覺の應ずる所なり、
一四三五ー三六　見不見なる者は、色を通ずるの竅にして、明暗に忤わざるなり、
一四三七ー三八　夫れ室の明に於るや、明の如し外より至れば、則ち其の暗は奚んか去らん、
一四三九　暗は舊より已に充たば、則ち明は何に由りて入らん、
一四四〇ー四一　表の影に於る、已に其の有する所なれば、則ち日の爲に横斜せられず、
一四四二ー四三　若し其の有する所に非ずんば、則ち奚れに自りて來らんや、
一四四四　明暗なる者は。麁なり。
一四四五ー四六　而れども猶お其の跡を窺い難し。是の故に轉ずれば則ち轉ず。
一四四七　持すれば則ち持す。
一四四八　明なれば則ち明なり。
一四四九　暗なれば則ち暗なり。
一四五〇　精は麁と隔てず。没して其の間に露す。
一四五一　若く以て絡繹として往來す、
一四五二　經一、緯一、
一四五三　處は坱然として塞せば、則ち萬物は擾擾として、聚散解結す、
一四五四　時は衰然として通せば、則ち萬期は憧憧として、往來生化す、
一四五五　若く以て倏忽として聚散す、
一四五六　聚まる者は必ず聚まる、

(PA 159)

一四五七　散ずる者は必ず散ず、
一四五八　聚まる者は必ずしも聚まらず、
一四五九　散ずる者は必ずしも散ぜず、
一四六〇　以て常なるに非ず、
一四六一　以て變なるに非ず、
一四六二　以て自なるに非ず、
一四六三　以て使なるに非ず、
一四六四　聚まる可く、散ず可き者は、乃ち機なり、
一四六五　以て聚まらざる能わず、以て散ぜざる能わざる者は、乃ち勢なり、
一四六六　聚散を爲す者は、神の機に入るなり、
一四六七　聚散を成す者は、天の跡を收むなり、
一四六八ー六九　入機と收跡とは。精と雖も猶お測る可きなり。
一四七〇　唯だ聚まれば則ち聚まる、
一四七一ー七二　散ずれば則ち散ず、孰れか得て端倪せん。
一四七三　若く布置整齋す、
一四七四　若く更互錯綜す、
一四七五　若く懸けて之を列ぶ、
一四七六　若く陳べて之を羅ぬ、

一四七七　之に沿い之に泝る、
一四七八　唯だ其れ然り。然れば則ち然らざる莫し。
一四七九　然らざる莫ければ。則ち然るに遺す莫し。唯だ
一四八〇　其の室を幽に閉ず、
一四八一　其の戸を明に開く、
一四八二　其の故に泝り難し、
一四八三　其の理に沿い易し、
一四八四―八五　戸を開きて理に沿えば。居る者は以て路に上る。
一四八六　路は其の勢に走る、
*一四八七　　其の力に回る、
*一四八八　往く者は後に向う、
*一四八九　來る者は前に向う、
一四九〇　開閉は異なりと雖も、而も幽明は居を同くす、
一四九一　往來は反すると雖も、而も當遇は會を一にす、
一四九二　居を同くすと雖も、而も幽は則ち明の開く所に非ず、
一四九三　會を一にすと雖も、而も來は則ち往の鬼に異なり、
*一四九四―九五　事は理故を有す、麁資れば則ち通塞す、
一四九六―九七　宅は幽明を有す、麁資れば則ち明暗す。是を以て。

(PA 160, I 402a)

一四九八ー九九　一なる者は一を一一にすと雖も。而も混は亦た粲と。明中に竝び立つ。
一五〇〇　明なれば則ち幽ならず、
一五〇一　幽なれば則ち明ならず、是を以て。
一五〇二　幽明なる者は。徳の室戸なり。
一五〇三　暗は蔽うこと能わず、
一五〇四　明は照すこと能わず、
一五〇五　其の中に入る能わず、
一五〇六　其の外に出る能わず、
一五〇七　終に能く之を一にす、
一五〇八　徳の有するや、
一五〇九ー一〇*　終に能く然るを貌にす、一の貌なり、故に
一五一一ー一二　一の有す所なれば、神も違う能わず、
一五一三ー一四　二の行う所なれば、天も拒む能わず、
一五一五ー一八　天なる者は虚なり、地なる者は實なり、地は天を食んで而して天も亦た實す、
一五一九　而して後其の虚する者は稍や精なり、
一五二〇　天なる者は動く、地なる者は止まる、天は地を食んで而して地も亦た動く、
一五二四　而して後其の靜なる者は稍や精なり、蓋し
一五二五　形の正斜、

一五二六―二七　色の清濁　麁の對する所なり。
一五二八―二九　精は遂に痕を没するに至る。精は遂に痕を没するに至ると雖も。
一五三〇　而も猶お且つ麁と竝び對す。是を以て。
一五三一　其の謂う所の精も亦た明中に粲立して。
一五三二　遂に麁を爲すなり。是を以て。
一五三三　幽なれば則ち精は入る能わず。
一五三四―三五　入る能わずと雖も。而も神は之をして明と粲立せしむ。故に
一五三六　一天一神。物反し力均し。
一五三七　此に走らざること能わざるは則ち勢なり、
一五三八　能く此に維持する者は　力なり、是を以て。
一五三九　其の理は沿う可し、
一五四〇　其の故は泝り難し、
一五四一　泝り難くして而も冥焉の故は遁れず、
一五四二　沿う可くして而も照然の理見る可し、故に
一五四三―四四　昭昭は見る可しと雖も、而も冥冥見る可からず、
一五四五―四六　冥冥見る可からずと雖も、而も亦た太だ昭昭たり、蓋し
一五四七　故なる者は其の然る所なり、
一五四八　理なる者は其の以て然るなり、

(PA 161)

一五四九ー五〇　蓋し一一の分合。體用は則ち能く隠る、
一五五一　天地は則ち能く露す、
一五五二ー五三　宙は通し宇は塞す、而して天は容れ物は居る、
一五五四ー五五　居る者も亦た容る、而して大は遂に小に之く、
一五五六　小は則ち大に資る、
一五五七　大は則ち小に給す、
一五五八ー五九　本は幹し神は運す、而して天は體し神は用す、
一五六〇ー六二　用する者も亦た體す、而して爲は遂に作に之く、是に於て。大物は小物を散ず、
一五六三　無意は有意を散ず、
一五六四　有意を人と爲す、
一五六五　無意を天と爲す、
一五六六　大物を天と爲す、
一五六七　小物を物と爲す、
一五六八　人なる者は各物中の一物なり、
一五六九　意なる者は各神中の一神なり、
一五七〇　人は眇たる此の神物を有す。
一五七一　勢を彼の神物に張る。
一五七二ー七三　故に。天なる者は。爲して思わず。分ちて計えず。

(I 402b)

之を計え之を思うは、人の能なり、
計えて盡くさず、思うて失する有るは、人の拙なり、是の故に。
故なる者は其の然る所なり、
理なる者は其の以て然るなり、是の故に。
以て然るは則ち昭昭なり、暗の蔽う所に非ず、
然る所は、則ち冥冥なり、明の照す所に非ず、
冥冥の中は、既にする所有り、
昭昭の中は、以て當たる有り、是を以て。
然る所の者は冥焉、
以て然る者は昭焉、是れ廼ち、故は未發に在り、
理は已發に在り、
已に然る者は跡なり、
然るに當るべき者は理なり、是れ廼ち、故は已發に在り、
理は未發に在り、是を以て。
理は昭昭たりと雖も、而も然る所に溯ぼれば則ち冥なり、
故は冥冥たりと雖も、而も然るに當るに推ば則ち昭なり、
故は冥を以て體と爲す、是を以て、跡は必ず随いて没す、
理は昭を以て體と爲す、是を以て、機は必ず随いて顯る、

(PA 162)

一五七四
一五七五
一*五七六
一*五七七
一五七八ー七九
一*五八〇ー八一
一五八二
一*五八三
一*五八四
一五八五ー八六
一五八七
一五八八
一五八九ー九〇
一五九一
一*五九二ー九三
一五九四ー九五
一*五九六ー九七
一*五九八ー九九

一六〇〇　徳は。是の自から然るの天を有す、
一六〇一　　彼の然ら使むるの神を用す、
一六〇二*　爲は則ち素、
一六〇三　成る者は則ち文なり、
一六〇四　氣物性體は爲具を爲す、
一六〇五　会易天地は成具を爲す、
一六〇六*　成具は則ち全を成す　未だ全ならざれば則ち　各　其の天地を有す、故に
一六〇七　成具は亦た小物なりと雖も、
一六〇八　小物は則ち大に資る、資れば則ち小も亦た全なり、故に
一六〇九　成具は則ち其の天地を對有す、
一六一〇ー一一　小物は則ち其の天地を竝有し　全物と勢を張る、
一六一二ー一三　故に一一の道。分れて　各　勢を張る。各　勢を張ると雖も。
一六一四　而も彼此は相い反す。彼此相い反すれば。
一六一五　則ち一の有する所、
一六一六ー一七　乃ち一　之を亡う　是を以て。體なる者は、氣能く之に體するに由りて、而して體なり、
一六一七ー一八　　用なる者は、體能く之を用するに由りて、而して用なり、
一六一九ー二一　物は體し神は用す。全の成る所なり。是を以て火は焔焔を體にす、而して燔灼を用う、
一六二二　　水は溶溶を體にす、而して滋潤を用う

一六二三　火は焔焔の灼を露す、而して溶溶の潤を没す、
一六二四　水は溶溶の潤を露す、而して焔焔の灼を没す、
一六二五　地は一大全物。
一六二六　全は偏を分つ、
一六二七　大は小に之く、
一六二八　小は能く大に居る、
一六二九　偏は能く全を成す、
一六三〇　物は則ち神の物なり、
一六三一　神は則ち物の神なり、故に
一六三二―三三　天は則ち物を没す。衰衰たり、
一六三四　坱坱たり、
一六三五　經通は時を爲す、
一六三六　緯塞は處を爲す、
一六三七　處なる者は、物を容るる者なり、中定りて物は位す、
一六三八　時なる者は、神を運する者なり、今見れて神は游す、
一六三九―四〇　天なる者は精なり、宙は以て自から通ず、
一六四一　宇は以て自から塞す、
一六四二―四三　物なる者は麁なり、神は斯の中に活す

(I 402b)

(PA 163)

一六四四　物は斯の中に立す、故に
一六四五　宙は袞袞として引きて經す、神は得て之に路す、
一六四六　宇は坱坱として容れて緯す、物は得て之に宅す
一六四七*　徳は能く之を含む
一六四八*　衝は能く之を開く、故に。
一六四九ー五〇*　物は自から大小長短を有す。長大は能く天地を成す、
一六五一*　短小は能く天地を爲す、故に。
一六五二　長大は全物中に居る、
一六五三*　短小は長大中に散ず、故に。
一六五四　成る者は全に歸す、
一六五五ー五六*　散ずる者は瑣を爲す、全は以て瑣を統ぶ。其の歸するや一なり。
一六五七*　故に。全物は、大に遺さず、
一六五八ー五九*　小物は、皆大に居り、長に出でず、
一六六〇　長に從がう、是を以て。
一六六一*　萬物は我と同じ。運轉する所の氣象を通中に經歷して、以て歲日を期す、
一六六二　彼此する所の氣質を塞中に交接して、以て天地を成す、故に。
一六六三　其の意を神に於て資る、
一六六四　其の身を物に於て資る、
　　宇は神を容る、

一六六五　宙は物を率ゆ、
一六六六　宙は神に路す、
一六六七　宇は物に宅す、
一六六八　性は神を活す、
一六六九　物は體を立す、
一六七〇　神は宙に行く、
一六七一　物は宇に居る、夫れ
一六七二*　精なる者は、精にして神を見す、
一六七三　體なる者は、麁にして物を露す、
一六七四　物は神に體す、
一六七五ー七六　神は物に用す、故に宙は以て宇を運す、
一六七七　宇は以て宙を維す、
一六七八　本は以て神を護す、
一六七九　神は以て本を活す、
一六八〇　天は融して神は通ず、
一六八一　天は運して地は立す、
一六八二　唯だ其の混焉、體として性ならざる莫く、性として體ならざるは莫し、
一六八三　唯だ其の粲然、氣は能く物を没す、物は能く氣を隠す、是を以て。

(PA 164)

一六八四　物は坱坱の宇に塞す、
一六八五　神は衮衮の宙に通ず
一六八六　剖析の至る所、散じて已まず、
一六八七　混一の成る所、統べて垠無し
一六八八　統ぶれば則ち各散は歸一す、
一六八九　剖すれば則ち一物は瑣碎す、
一*六九〇　性は隠れて體は露す、
一*六九一　體は没して性は見る　是を以て
一六九二　一一の各一一を有するは。
一六九三　一の一一を有するに同じ。
一*六九四ー九六　有すれば則ち之を發す　一の二なる所なり、　一は以て統ぶ　二は以て散ず、
一*六九七ー九九　發すれば則ち之を有す　二の一なる所なり　散は以て偏す、　統は以て全す、
一*七〇〇ー〇一　依資して一に歸する所なり　是を以て。　麁なれば則ち物　露す、
一七〇二　精なれば則ち跡　没す、
一七〇三　立てば則ち粲として條理を有す、
一七〇四　成れば則ち混として罅縫を没す、
一七〇五　故に成具は全物に成る。
一七〇六　爲成の分は如何。

(I 403b)

緯に於ては則ち天地、氣物性體し　爲具を爲す、
天は覆い地は載す、而して
日月景影は、衰衰に從いて循環すれば、則ち晝夜成り、冬夏成る、
水燥土石は、块块に居りて布列すれば、則ち雲雨成り、山海成る、
經に於ては則ち天神、活立幹運、爲具を爲す、
神は爲し天は成す、而して
往來解結は、衰衰に從いて競い走れば、則ち循環成り、鱗比成る、
感應當遇は、块块に居りて相い交れば、則ち事物成り、當命成る、
成らざれば則ち爲さず、
爲さざれば則ち成らず、
姑く小物に就きて之を言うに。
松柏檜杉は、屋の爲具なり、而して屋の成るは則ち榱題柱桷なり、
氣液骨肉は、人の爲具なり、而して人の成るは則ち耳目手腳なり、是を以て。
其の爲す者は卽ち其の成る者と雖も、
　成る者は卽ち其の爲す者に非ず、是を以て。
通塞没露は、宇宙天地を成す、
清濁乾潤は、日影水燥を成す、
而して後、日影水燥。轉に從いて持に居る。而して交錯すれば。則ち

一七〇七
一七〇八
一七〇九ー一〇
一七一一ー一二
一七一三
一七一四
一七一五
一七一六*
一七一七
一七一八
一七一九
一七二〇ー二一
一七二二ー二三
一七二四
一七二五
一七二六
一七二七
一七二八

一七二九　成る者も爲すこと有りて。而して又た爲中に成を有す。是を以て。　(PA 165)
一七三〇ー三一　日月景影は、東西の轉を會して、而して順逆の行を爲す　氣象は地持に轉じて、而して
一七三二　面背遠近すれば、則ち晝夜冬夏は、地上に成る、
一七三三ー三四　水火溼燥は、升降を地に依りて、而して發收の氣を爲す、氣質は地持に運して、而して
一七三五　聚散升降すれば、則ち雨暘雷雪は、持中に成る、而して
一七三六　土石は虛動に居り。水と燥とを載す。
一七三七　水土は地を爲す、
一七三八　燥氣は天を成す、
一七三九　水は土を抱けば、則ち島嶼を成す、
一七四〇　土は水を抱けば、則ち江湖を成す、
一七四一　高くして山嶽を成す、
一七四二　深くして潭渦を成す、
一七四三　既已に其の物を成さば。　(I 404a)
一七四四　彼の爲する者と。終に別有るなり。
一七四五　会易は對偶す、
一七四六　大小は容居す、
一七四七　会易は相對すと雖も、
一七四八　大小は容居すと雖も、

一七四九　既已に各を爲せば。則ち彼此の間。
一七五〇　隔てざる者は相い融す、
一七五一　隔を爲す者は相い通ず、
一七五二　融するを以てして天なり、
一七五三　通ずるを以てして神なり、融すれば則ち終に一なり、
一七五四　二を有するを以て然り、通ずる者は猶お二なり、
一七五五　體の隔つるを以て然り、
一七五六*　通ずれば則ち對偶に於ては、則ち易は緼し会は絪す、
一七五七*　容居に於ては、則ち大は給し小は資る、故に
一七五八*　其の隔たるに互して、事物は交接し、鬼神は感應す、
一七五九　其の通ずる所に、生化は往來し、天命は當遇す、
一七六〇―六一　夫れ萬物の用は。大に資り各に依る、
一七六二　偶を反し類を比す、
一七六三　大に資るを以て、而して天に應ぜざる莫し、
一七六四　各に依るを以て、而して事に通ぜざる莫し、
一七六五　反するを以て、而して偶に有らざる莫し、
一七六六　比するを以て、而して類に有らざる莫し、蓋し
一七六七　大物は一體にして、

一七六八　各體は相い隔つ、
一七六九　大氣は一用にして、
一七七〇　各氣は相い依る、
一七七一ー〇二　體は各を爲すに由りて、而して物物相い隔つ、
一七七三ー〇四　用は反を爲すに由りて、而して氣氣相い通ず、
一七七五ー七六　一資一應は、大小の間なり、
一七七七ー七八　一交一接は、彼此の道なり、
一七七九　接する者は、體の往來なり、
一*七八〇　交わる者は、氣の往來なり、故に
一七八一　大小は各おの天地を有す、故に其の勢は各に張る、
一七八二　各各は互いに天地を有す、故に其の用は體に依る、故に
一七八三　天は則ち天にして天の天地體用を具す、
一七八四　地は則ち地にして地の天地體用を有す、
一七八五　著にして日月水火なり、
一七八六　小にして艸木禽獸なり、
一七八七　其の事は同じ。此の故に。
一七八八ー八九　天地日影の體を立て、而して轉持照蔽の用を有す、
一七九〇ー九一　東西上下の位を成す、而して晝夜冬夏の跡　定る

彼此の相い依りて成る所 然るなり。故に
萬物の各神物を具するは。大物の絪縕に由る。蓋し
大物なる者は體なり 而して
絪縕なる者は用なり、
體を隔てて神物を有す。而して用を竝立の間に於て通ぜんと欲す。
是に於てか。氣は交わり體は接す 艸木の雨露寒暄に於る、
鳥獸の飮啄營窟に於る 皆な通隔の事なり。
用なる者は、經中に行き 機に爲し 跡に定まる、
體なる者は、緯中に居り、天は之を容れ 物は之に居る、
物を隔て氣を通ず、彼此同じからざるなり、
緯に居り經に行く、小大亦た一なり、是の故に。
其の體は立ち用は行わるなり。
神は往來に爲す、
天は當遇に成す、
往けば則ち來る者に當る、
來れば則ち往く者に遇う、
物は往來に通ず、之を生化と謂う、
事は當遇に定る 之を天命と謂う、

*一七九二
一七九三ー九四
一七九五
一七九六
一七九七ー九八
一七九九ー〇〇
一八〇一ー〇二
一八〇三
一八〇四
一八〇五
一八〇六
一八〇七
一八〇八
一八〇九
一八一〇
一八一一
一八一二ー一三
一八一四ー一五

(I 404b)

一八一六　終に此に走らざるを得ず、
一八一七　終に此に維せざるを得ず、然り而して
一八一八　以て能く冥冥なり、
一八一九　以て能く昭昭なり、
一八二〇　以て然る者は昭なり、
一八二一　然る所の者は冥なり、
一八二二　然る所の者は故なり、
一八二三　以て然る者は理なり、是に於て。
一八二四　已に然る者も亦た故と曰う、
一八二五　當に然る者も亦た理と曰う、
一八二六　人は。當然なる者を觀て、未だ以て然るの條理を知らず、
一八二七　已に然る者を察し、未だ然る所の故を考えず、
一八二八　故を統べ理を統ぶ。見るれば則ち未と已は交互す。
一八二九　今の理を譚ずる者は。則ち理を以て氣に易う。
一八三〇　氣は没する可からず。故に理氣の説有り。
一八三一　理なる者は、天なり、事物の以って然るなり、
一八三二　氣なる者は、神なり、事物の然るを爲すなり、故に。
一八三三　轉じて當に圓なるべく、持して當に直なるべきは、則ち理なり、

一八三四　轉じて圓を爲し　持して直を爲すは、則ち氣なり、
一八三五　（編集による空白。）
一八三六ー三七　況んや其の理とする所の者は。未だ條理の故を得ず。
一八三八ー三九　理非の理に局するをや。是に於て。死底の理を以て、活底の氣に抗す。是に於てか。氣は活し理は死す。
一八四〇ー四一　理は氣を生ぜず、
一八四二　氣は則ち理を有す、
一八四三　氣の到る所　理は有らざる無く、
一八四四ー四五　理の在る所　氣は必ずしも随わず、
一八四六ー四七　理を譚ずる者は、將に之を以て事物を盡くさんとす、
一八四八　理を排する者は　將に之を除きて事物を説かんとす、
一八四九　偕に未だ理を得ざる者なり。
一八五〇　理なる者は、一一の條理を示すなり、
一八五一　故なる者は　混成の罅縫を没すなり、
一八五二　罅縫を没すれば、則ち冥冥として示さず、
一八五三　條理を立すれば、則ち昭昭として能く燭す　故に
一八五四　條理に由りて。以て事物の以て然る所を照せば。
一八五五　事物は逃るるに地無し。
一八五六

然りと雖も。理も亦た故の偶なり。

照なる者は、暗を得て照すを得る、

暗なる者は、明を待て暗きを得る、故に

理は冥冥の地を得て、而して昭昭を施す、

故は昭昭の物を得て、而して冥冥を布く、是を以て。

氣は事物の然るを爲す、

理は事物の然るを照す、蓋し

理なる者は、能く照す者なり、

氣なる者は、能く爲す者なり、是を以て。

人造は則ち理先んず、

天造は則ち氣先んず、

譬えば舟車を造るが如し。

舟に先んじて舟の理を照し、之を以て此を造る、果たして載泛の用を爲す、

車に先んじて車の理を照す、之を以て此を造る、果たして轉持の用を爲す、

輕虛は、理、當に載せて泛ぶべし、然れども載せて泛ぶことを爲す者は、氣なり、

直圓は、理、當に轉じて持すべし、然れども轉じて持すことを爲す者は、氣なり、

是れ人造の、理を先んじ、

天造の、氣を先んずる所なり、

(I 405a)

(PA 168)

一八五七
一八五八
一八五九
一八六〇
一八六一
一八六二
一八六三
一八六四
一八六五
一八六六
一八六七
一八六八
一八六九－七〇
一八七一－七二
一八七三－七四
一八七五－七六
一八七七
一八七八

一八七九　輕虛の載泛する所なり、
一八八〇ー八一　直圓の轉持する所なり、已に其の故を有するなり。
一八八二　當に載泛すべきを輕虛に於て照す、
一八八三　當に轉持巢べきを直圓に於て照す、是の故に。
一八八四　載泛轉持に勝る者は、其の力なり、
一八八五　載泛轉持に走る者は、其の勢なり、
一八八六　當然の理は、已に然るの、故に由りて論ず可し、
一八八七　已然の故は、然るを爲すの氣に由りて觀る可し、是の故に。
一八八八　露する者は昭灼なり、
一八八九ー九〇　沒する者は溟涬なり、理を以て知る可からず。
一八九一　數を以て推す可からず。
一八九二　象を以て狀す可からず。
一八九三　神を以て測る可からず。蓋し。
一八九四　天なる者は能く定る、
一八九五　地なる者は能く變ず、故に
一八九六ー九九　天に於ては、則ち日月の道、運轉の行、勢は理に隨うなり、
一九〇〇ー〇一　地に於ては、則ち寒熱の運、風日の行、勢理各おの行わる、是の故に。
一九〇四　理は、則ち子、當に孝なるべく、臣、當に忠なるべし、

氣は、則ち子　未だ必ずしも孝ならず、臣　未だ必ずしも忠ならず、故に
勢の走るに至りては。則ち理の當然なる者を壓す。
當然なる者は。其の然らざるを得ざる者を如何ともする能わず。故に
勢は理に會えば、則ち事物は和順す、
勢は理に忤えば、則ち事物は乖戻す、故に

（欄外上段追記につき削除）

理を知りて勢を知らざれば、必ずや誣る、
勢を知りて理を知らざれば、必ずや眩む、
或るひと曰く照す者は智なり。理に非ず。是れ未だ盡くさざるなり。
夫れ理なる者は。分れて條理を有す。故に
昭昭は以て照す。

（編集による空白）

然れば、則ち照す者は、燭なり、目は以て之を見る、
　照す者は、理なり、智は以て之を知る、
故に燭を秉りて行く者は、顚倒の患無し、是れ理の晦ます可からざる所以なり、
燭を失いて顚倒すと雖も、而も尚お倀倀として已む可からざる者は、勢なり、故に
天地を假りて以て之を牽けども。而も勢は則ち停む可からざるなり。
是を以て。勢の走る所を知りて、而も以て事に處す可し、

(PA 169)

一九三三　理の在る所を知りて、而も以て物を暁る可し、

一九三四　圓轉は首尾を見ず、

一九三五ー三六　直推は標本を獲ず、没と露と。孰れか其の一を執らん。

一九三七　已然なる者は、則ち顧みて之を視る、

一九三八　當然なる者は、則ち望みて之を推す、

一九三九ー四〇　今一理を溟涬無朕の前に懸けて。盡く事物を此に繋ぐ。

一九四一　是れ固より天地は廢す可からざる者と雖も。

一九四二　亦た偏重の任を擔うこと能わず。

一九四三　故は理を含む、

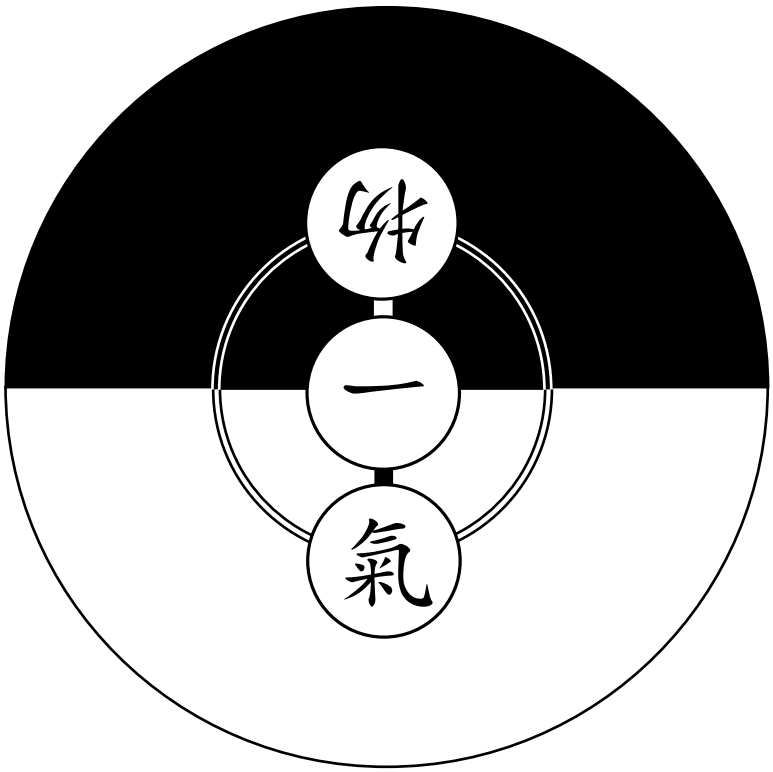
一九四四　理は故に由る、

一九四五　其の覆載する所を觀て、而して覆載を推す、

一九四六　其の往來する所を觀て、而して往來を推す、

(PA 170)

一神一物圖一合

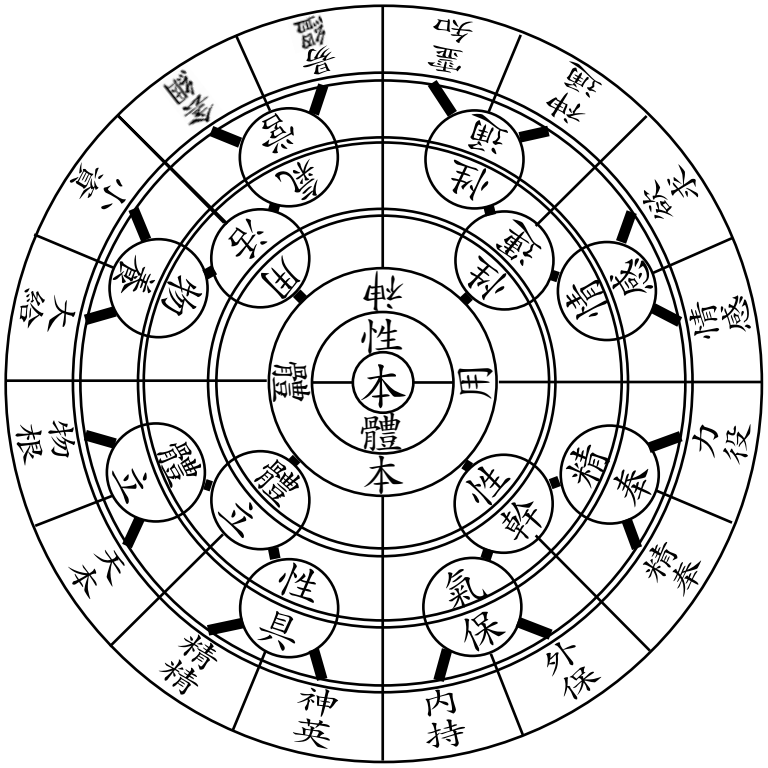

物
一
氣

神物剖析圖

天神本神圖一合

神
本
物
大意
主旨
幹注
立題
歸納
分目

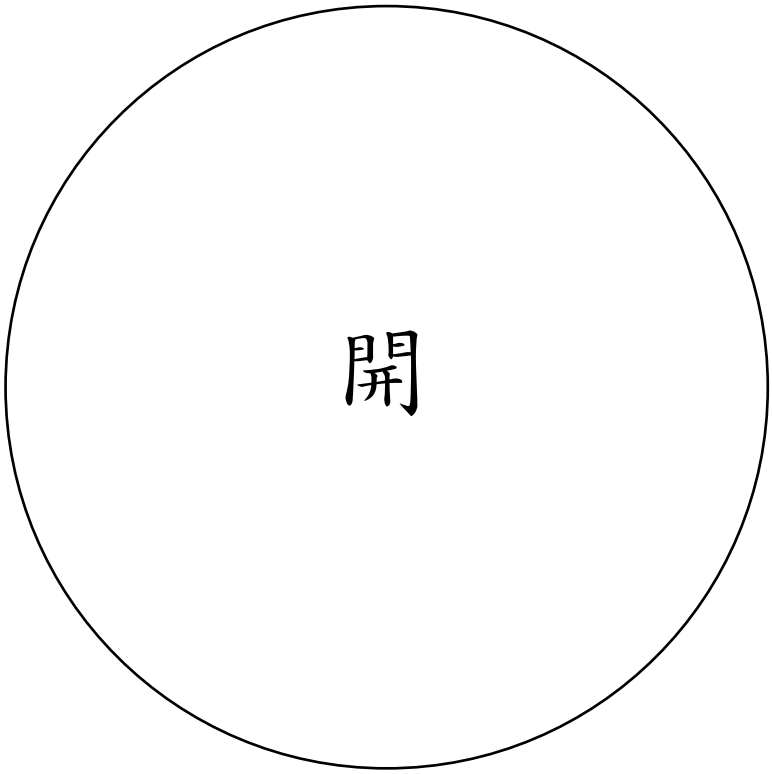
同剖析一合


本
性
體
本
用
神
體
質
體
立
性
具
性
幹
精
奏
氣
保
主
宰
氣
治
主
宰
氣
治
精
奏
力
役
外
保
內
持
神
英
精
精
天
本
物
根
大
容
六
容
精
奏
力
役
外
保
內
持
神
英
精
精
天
本
物
根
大
容
六
容

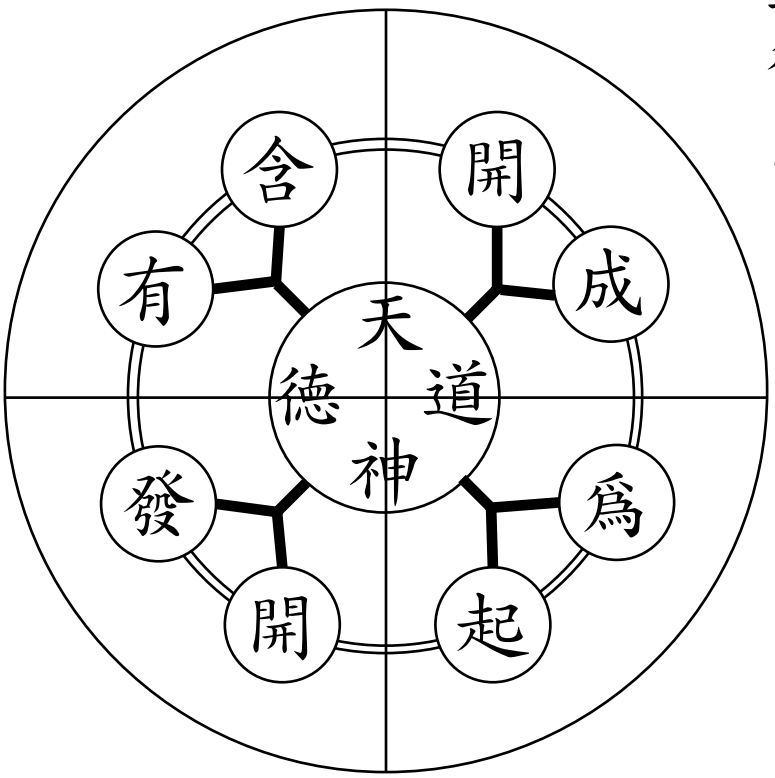
天
氣
物
神
道
德
上
路
道
開
居
宅
自
然
夫
婦
體
質
空
竅
氣
化
露
氣
爲
狀
沒
物
融
徧
通
貫
隔
物
交
事
變
換
主
人
明
白
無
爲
夫
婦
居
室
昭
理
成
跡
爲
機

道德混成圖

道德圖一合


開

天神道德圖



一九五八　天神

一九五九　精麁狀貌。有に遺す所莫し。

一九六〇　有に遺す所莫くして。而して精麁狀貌。開かざる所莫し。

一九六一　開けば則ち一有は　之を含む

一九六二　有せば則ち二は能く之を發す、

一九六三　開くに由りて、居る者の宅を有し、行く者の路を有するを見す、

一九六四　有すに由りて、宅の居る者を有し、路の行く者を有するを見す、

一九六五　神なる者は、活して能く爲す、

一九六六　物なる者は、立して能く成る、

一九六七ー六八　二は一に有せられ、

一九六九　一は二に居る、是に於て。經は没し緯は露す、

一九七〇ー七一　剖析は二に之けば、則ち物　各にして氣反す、

一九七二ー七四　物は體し氣は用す、

一九七五　活立は相い用うれば、則ち氣交わり體接す、是に於て。爲す者は狀を見す、

一九七六ー七七　神爲は則ち事、其の然ら使むるに當りて狀を見す、

一九七七　成る者は貌を露す、

一九七八ー八〇　狀　見れて而して其の然ら使むる者　見る可し、

蓋し其の狀は、機を以て發す　跡を以て收む

一九八一
一九八二
一九八三ー八五
一九八六ー八八
一九八九
一九九〇
一九九一ー九三
一九九四
一九九五
一九九六
一九九七ー九八
一九九九
二〇〇〇ー〇一
二〇〇二
二〇〇三
二〇〇五
二〇〇六ー〇*七
二〇〇八

天成は則ち物、其の自から然るに由りて貌を露す、
貌なる者の露して而して其の自然なる者を察す可し、
蓋し其の貌は、戸を開きて明なり、室を塞ぎて幽なり、
機なる者は、活の柄なり、變を以て往く、則を以て立つ、
變なれば則ち定規の測る所に非ず、
識らざる者は、尚お規規として有意を以て説く、
成なる者は、立の體なり、然を以て立つ、自を以て住す、
然は則ち神爲の運ぶ所に非ず、
識らざる者は、祇だ芒芒として有體を見て説く、故に。

機なる者は、發して已まず、
　變じて住せず、但だ其の天なる者は意無し、
　　其の人なる者は意有り、
有意は無意の天を觀て、動輒すれば禍福災祥を以て之を擾す、
跡なる者は、收めて已まず、
　定りて換らず、但だ其の神なる者は爲する有り、
　　其の天なる者は成する有り、
有爲は無爲の天を觀て、動輒すれば意知機巧を以て成を窺う、
狀は貌を以て往く、

(I 406a)
(PA 183)

貌は狀を以て立つ、故に狀は使然に爲す、
貌は自然に成す、
自と使とにして、而して狀は貌に分る、
自使は然に合し、而して狀は貌に合す、
祇だ然に得て貌を見す、
然に失して自使に堕す、
如何ぞ其の然とするは。則ち
之を混に於て然とすれば、則ち其の混を貌とす、
之を粲に於て然とすれば、則ち其の粲を貌とす、故に
然なる者は。如なり。若なり。此の如きなり。
有意は窺窬して、意を其の正貌に容る、
有意は窺窬して、意を其の正狀に容る、
之を天命に失う、
之を天物に誤つ、
蓋し大物の成は。一神一物なり。物は天地を開く、
神は天神を開く、
天地なる者は、地は物にして而して天は氣なり、
天神なる者は、神は物にして而して天は氣なり、

二〇二九　地は、物なり、故に天の爲に容れらる、
二〇三〇　神は、物なり、故に天の爲に有せらる、故に
二〇三一　天地は、則ち氣を没し物を露し、性を隠し體を見す、
二〇三二　天神は、則ち氣を露し物を没す、體を隠し性を見す、故に
二〇三三　天地は、其の物を結びて、而して其の氣を散ず、
二〇三四　天神は、其の物を貌にして、而して其の事を狀にす、
二〇三五　活せずして爲さずんば、孰れか氣の神を認めん、
二〇三六　立せずして成らずんば、孰れか物の天を認めん、
二〇三七　爲成なる者は、神の行う所なり、
二〇三八　戸室なる者は、神の居る所なり、
二〇三九　自なる者は天の貌なり、
二〇四〇　使なる者は神の態なり、
二〇四一　天は先んぜず、
二〇四二　神は後ならず、
二〇四三　天命の狀、
二〇四四　天物の貌、
二〇四五　若し自なれば則ち使を如何にせん、
二〇四六　若し使なれば則ち自を如何にせん、

(PA 184)

(I 406b)

二〇四七　此に走る、
二〇四八　此に維す、
二〇四九　理は沿う可し、
二〇五〇　故は泝り難し、
二〇五一　一は居る、
二〇五二　一は行く、
二〇五三　其の有は幽なり、而して
二〇五四―五五　其の發は明なり、是に於て。事物の狀貌は乃ち此の如し。
二〇五六　道は、則ち其の路に上りて、而して其の宅に歸る、
二〇五七　徳は、則ち其の室を閉じて、而して其の戸を開く、
二〇五八―六〇　其の戸を開きて、而して其の途に上る、則ち萬有は畢く露す、
二〇六一―六二　其の宅に歸して、而して其の室を閉ず、則ち一有は寂たり、
二〇六三　行けば則ち露す、
二〇六四　止れば則ち宅す、
二〇六五　歸れば、則ち宅に止らざる莫し、
二〇六六　行けば、則ち路に上らざる莫し、
二〇六七　行く者は止れば、則ち路は卽ち宅なり、
二〇六八　居る者は行けば、則ち宅は卽ち路なり、

萬態は畢く見る、
鬱涛は痕を没す、是の故に。

(PA 185)

二〇六九　道は二に由りて而して其の路を爲す、
二〇七〇　徳は一を以って而して其の宅を爲す、
二〇七一　一は以て混成す、
二〇七二　二は以て粲立す、
二〇七三　一なる者は、粲立の居る所なり、
二〇七四　二なる者は、混成の行く所なり、
二〇七五　居に止り
二〇七六　行に動く、　居れば則ち其の宅なり、
二〇七七　其の室を閉じ
二〇七八　其の戸を開く、行けば則ち其の路なり、
二〇七九　其の機を爲す、
二〇八〇　其の跡を成す、
二〇八一　道は、其の戸を開きて而して行けば、則ち斯の路に上る、
二〇八二　徳は、其の宅に歸りて而して止れば、則ち其の室を閉ず、
二〇八三　宅路に就きて之を言えば、則ち麁露の物なり、
二〇八四　道徳に就きて之を言えば、則ち精没の氣なり、故に
二〇八五　行く者は從う者を率いる、而して從う者に緩急有り、
*二〇八六　容るる者は居る者を得る、而して居る者に廣狹有り、是に於て。

二〇八七　從う者は絡繹として、先後會違す、
二〇八八　居る者は參差として、大小錯雜す、故に
二〇八九　爲す者は機發す、
二〇九〇　成る者は跡收む、
二〇九一　發する者は、變じて窮まらず、
二〇九二　收むる者は、定りて揜わず、
二〇九三　不窮は妙を爲す、
二〇九四―九六　不揜は誠を爲す、窮まらず揜わず。以て事物を鼓舞す、
二〇九七　以て事物を檢束す、
二〇九八　不窮の變、有意は之を得る能わず、而して以て測る可からざると爲すなり、
二〇九九　不揜の定、有爲は之を得る能わず、而して以て揜う可からざると爲すなり、
二一〇〇　是を以て。一の立する所、物は其の宅に居る、
二一〇一　二の活する所、事は其の路に上る、
二一〇二―〇三　路上に就きて之を分かてば。地は以て此に宅す、
二一〇四　天は以て此に路す、

(PA 186)

二一〇五　氣象は天に行く、
二一〇六　氣質は地に居る、
二一〇七　天行けば則ち地は必ず居る、

(I 407a)

二一〇八　地居れば則ち天は必ず行く、故に
二一〇九　鳥は水に潜まず、
二一一〇　魚は天を翔けず、
二一一一―一二　之を人造に移して言わんに。舟は推す可からず、
二一一三　車は浮く可からず、
二一一四　是を以て。天地は一全物なり。
*二一一五　室を開き戸を閉ず、（室は閉じ戸は開く　と訂正あり。）
*二一一六　路は通じ宅は容る、
二一一七　天は自然に成り、
二一一八　神は若く爲さしめて、
二一一九　神爲は態　變じ、
二一二〇　天成は態　常なり、
二一二一　爲すを以て而して成る、
二一二二　成るを以て而して爲す、
二一二三　爲せば則ち以て居り以て行く、
*二一二四　成れば則ち以て宅し以て路す、蓋し。
二一二五　理は其の一を一一にして。剖析は窮り無し。故に
二一二六　爲成の二具は相い絪縕す。萬物は此の如く擾擾たり。故に天地は一大圓物なり。

(PA 187)

二一二七　天は日月を懸けて、而して晝夜朔望を代う、
*二一二八―二九　地は雲雨を運びて、而して雲雷雨雪を旋す、會易の文章を天に成すや、
二一三〇　天は方位を定めて、而して東西南北を分つ、
二一三一―三二　地は山水を定めて、而して湖海島嶼を爲す、氣物の文章を地に成すや、
二一三三　天地は乘載す、
二一三四　会易は絪縕す、
二一三五　動植は擾擾として。種を無數に分ち。人は其の中に在る。
二一三六　物に資りて以て身と爲す、
二一三七　神に資りて以て意と爲す、
二一三八―三九　終に有意の神を以て。以て萬物に勝る。能く萬物を使令す。
*二一四〇　是に於て。我れは已に使令の天地なり。
二一四一　規矩の方位に資り、而して東西南北を定む、
二一四二　分至の歳時を觀て、而して子午丙寅を準す、
二一四三　山に梯し海に航し、方域の盡くす所を探り、
二一四四　主に聲し聲に字して、經歷の久近を紀す、
二一四五　聲を以て主を被う、
二一四六　意を以て物を索む、
二一四七　聲主は會違す、

二一四八　意物は錯綜す、
二一四九　意匠の經營は、則ち同じきこと能わずと雖も、而も
二一五〇　實測の所驗は、則ち異なる可からず、
*二一五一　故に。陸は曼然として水に居る、
二一五二　水は邃乎として海を爲す、
二一五三　海は、中線の南に渺瀰とす、
二一五四―五六　壤は、中線の北に洪曠とす、大壤は兩堆し。一堆は北に竪す、
二一五七　一堆は中に横す、
二一五八　川谷は陸に撩亂として、
二一五九　島嶼は水に擁簇す、
二一六〇　南瞑は最も洪渺たり。其の中に壤有り。
二一六一　探索は猶お審かを闕く。
二一六二　日月東西は。噫嘻に從いて南北す。
*二一六三　南北の極は、晝夜を更す、
*二一六四　中線の地は、冬夏を再す、
二一六五　東西は運轉す、以て晝夜を成す、
二一六六　南北は噫嘻す、以て冬夏を成す、
二一六七　中線の下は熱勝る、

(PA 188)

(I 407b)

二一六八　兩極の下は寒勝る、
二一六九*　其の間は。則ち南北兩帶。春夏秋冬を更にす。
二一七〇　而して寒熱溫涼は交ごもに行わる。
二一七一　地球は一塊。半面を見せば。則ち半面を隱す。
二一七二　故に晝夜は一半。冬夏は竝び行わる。
二一七三　人は眇小の地に立ちて。半面の天地を見る。而して
二一七四　持中升降の間に居りて。
二一七五　東西の運轉を察せず。
二一七六　圓を觀て平と爲し
二一七七ー七九　直を觀て方と爲す、故に未だ實測を審かにせざれば。則ち條理繹ぬ可からざるなり。
二一八〇ー八二　宙は經し宇は緯す。天地と萬物と。皆な其の容率の間に在り。
二一八三ー八四　而して神と物とは。神は活して宙に路す、
二一八五*　物は立ちて宇に居す、
二一八六ー八七　物は。氣物なり。氣なれば則ち會易なり、物を性に成す、而して機を活して經に行く、
二一八八　物なれば則ち天地なり、物を體に成す、而して物を立して緯に居る、
二一八九　是を以て。天地は宇宙より巨なり、
二一九〇　象質は天地より著なり、
二一九一　象質は機を神にし、而して歲運を上下に行す

(PA 189)

二一九二　氣物は體を立して、而して天地を内外に爲す、是に於て。
二一九三　元氣は經緯を分ちて。而して經緯は物を分つ。
二一九四　氣物は天地を成す、
二一九五　会易は象質を露す、
二一九六　天地は剖對す、
二一九七　会易は絪縕す、
二一九八　萬物は以て其の間に化す、
二一九九―〇〇　萬物は萬に非ず。惟だ動植有り。動植は。居を水陸に分つ、類を剛柔に剖く、
二二〇一　剖析は盡きず。則ち啻に萬の盡す所に非ざるなり。
二二〇二*　夫れ天地会易なる者は。其の已に成る者なり。而れども
二二〇三　動植に於ては。則ち爲具なり。蓋し天地会易の成は。一氣一物の爲す所に成る。
二二〇四―〇五　其の體は、則ち天虚地實、轉剛持柔なり、
二二〇六　其の形は、則ち地直天圓、轉規守矩なり、
二二〇七　體は則ち形に成る、地下天上轉外持内、
二二〇八*　物は則ち位に立つ、是に於て。明暗寒熱は、時を其の上に刻す、
二二〇九―一〇　發收噫嗡は、氣を其の下に運す、
二二一一　水燥溼火は、物を持中に布く、而して

（而してを欠くか。）

雲雷雨雪は、其の間に變化す、

天は、清虚にして動く、
地は、土石にして止る、

(PA 190)

水は地を環し、燥は水を環し、水燥は地と圓を合して、而して地質の天地を開く、
日は轉を循り、影は日を循り、日影は轉と規を分ちて、而して天象の天地を開く、 (I 408a)
天地は混淪し、块块は洪荒を極む、
象質は絪縕し、衰衰は攸久を爲す、
體は虚實を爲す、
性は散結を爲す、
散ずる者は、虚に歸りて天に之く、
結ばる者は、實に從いて中に歸す、故に
彌いよ結んで彌いよ實し、彌いよ實して彌いよ重し、
沈下して動かず、疑然として其の中に立つ、
彌いよ散じて彌いよ虚し、彌いよ虚して彌いよ輕し、
浮升して停まらず、精は以て其の外を成す、
結ばる者は猶お下る所有れば、則ち中より重きは莫し、
散ずる者は猶お上る所有れば、則ち外より輕きは莫し、
虚實は清濁と相い得て。而して物は皆な見露す。

二一二三
二一二四
二一二五
二一二六
二一二七
二一二八
二一二九
二一三〇
二一三一
二一三二
二一三三
二一三四
二一三五
二一三六
二一三七
二一三八
二一三九
二一四〇

二二三一
色は象質を著にして、而して水火は照蔽通隔す、
二二三二
體は氣物に成りて、而して天地は虚實剛柔す、
二二三三
地壤は一圓塊を中央に點して。
二二三四ー三五
氣を浮かべ象を載す。夫れ地なる者は堅密なり、
二二三六
壤なる者は麁輭なり、
二二三七
突する者は山を成す、
二二三八
拗する者は壑を成す、
二二三九
下は則ち地なり、
二二四〇
上は則ち天なり、
二二四一ー四二
水は解中に結ぶ、而して拗中の天に居る、鹹は則ち海を爲す、
二二四三
淡は則ち水を爲す、
二二四四ー四五
土は結中に解く、而して突處の天に居る、平なれば則ち原を爲す、
二二四六
高ければ則ち山と成る、
二二四七
山原を合せて陸と曰う、
二二四八
淡鹹を并せて水と曰う、
二二四九
陸は曼然として燥に居る、
二二五〇
壑は邃乎として水を積む、故に。
二二五一ー五二
山は突起して燥に入る、本は合して末は分る、

二二五三ー五四
二二五五
二二五六
二二五七
二二五八ー五九
二二六〇ー六二
二二六三ー六四
二二六五
二二六六
二二六七ー六八
二二六九
二二七〇ー七一
二二七二
二二七三
二二七四
二二七五ー七六
二二七七
二二七八

水は拗陥して壑に充つ、本は分れて末は合す、
陸の水中に在るは、呼んで島嶼と爲す、
水の陸中に在るは、名して湖沚と曰う、蓋し
日月の照蔽を更える所なり。
地　受けて冬夏晝夜の文を成すは地の天に和するなり。
然りと雖も。地の持中に居る。持を以て天と爲す、天中に風恬有り、
　地を以て地と爲す、地中に山水有り、
是に於て。風恬山水は。持中に天地を開く。而して動植は此に居る。
壤なる者は麁實なり、
水なる者は密實なり、實する者は、則ち能く氣を發す、
天なる者は精虛なり、
燥なる者は麁虛なり、虛する者は、則ち能く物を拒む、是に於て。
天なる者は精清なり、
燥なる者は麁濁なり、
地は麁濁を以て之を發す、
天は精清を以て之を拒む、其の發の拒に會いて結ぶや、
天を化して雨と爲す、
地を化して水と爲す、

(PA 191)

拒む所は則ち卑きに之かざるを得ず、水の行なり、
天なる者は会を畜う、
地なる者は易を畜う、
地は易を畜うるを以て之を發す、
天は会を畜うるを以て之を鬱す、鬱の發に會いて解るや、（其のを欠くか。）
天に於て燥を爲す、
地に於て潮を爲す、
鬱すれば則ち高きに發せざるを得ず、燥の行なり、
天は輕くして無際に浮く、
地は重くして有極に沈む、
夫れ物や。天地なる者は大、萬物を得て之を容る、
萬物なる者は小、大物を得て之に居る、
大物なる者は、自から立ち自から行く、
小物なる者は、依りて立ち依りて行く、
輕重は相い動けば、則ち輕き者は浮く、
重き者は沈む、
大小は相い居れば、則ち大なる者は容る、
小なる者は居る、此の故に。

(I 408b)

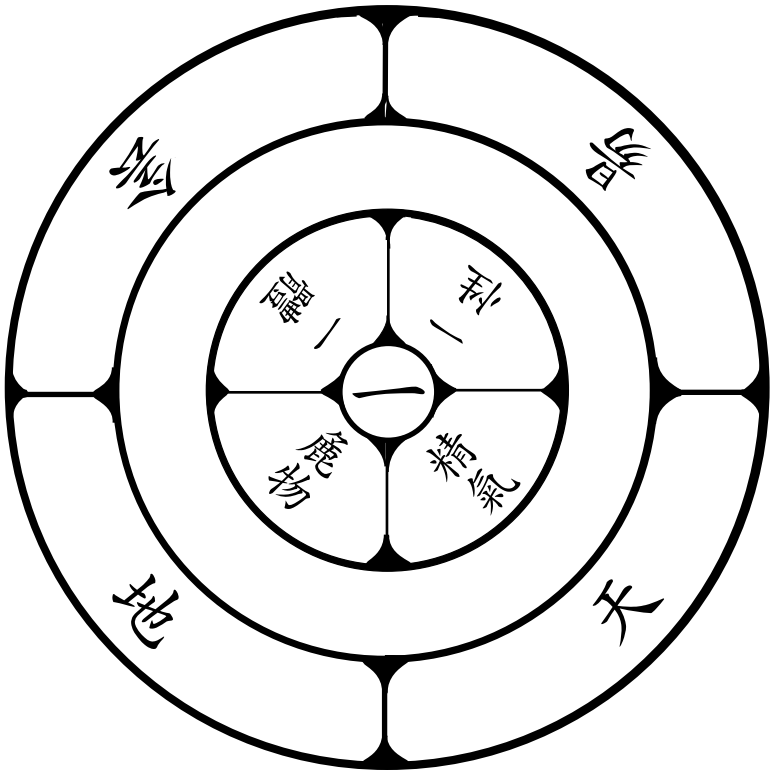
*二三〇〇　天にして星沫、
二三〇一　地にして雲雨、小物の性成りて、共に虚中に居る
二三〇二　地にして土石、
二三〇三　天にして動植、小物の體成りて、共に實中に居る、而して
二三〇四　星沫は精に由る、土石は實に由る、共に其の體を長しくする者なり、
二三〇五　雲雨は龐に由る、動植は虚に由る、共に其の體を換うる者なり、
二三〇六　天は緯具を設け、諸を坱坱に塞ぐ、以て
二三〇七　夫の經具は、諸を衮衮に通ずる者に合す、
二三〇八　会易は相い得る、
二三〇九　天地は正に全し、是を以て。
二三一〇　天は。緯中に物を成す、
二三一一―一三　經中に跡を成す、其の道を觀る、而して
其の徳に至る、
二三一四　出づれば則ち戸を開く、
二三一五　歸すれば則ち室を閉ず、
二三一六　不揜の誠を奉ず、
二三一七　不明の室を仰ぐ、
二三一八　神は。經中に氣を活す、

二三一九ー二〇　通中に機を發す、其の機を觀る、而して
二三二一　其の路に依る、
二三二二
二三二三　往けば則ち成る、
二三二四　來れば則ち變ず、
二三二五　不測の妙を仰ぐ、
二三二六　鬱浡の途に伴う、
二三二七ー二八　是の故に。其の爲は、機に活し、變に神す、
二三二九　其の成は、跡に認め、常に定す、故に氣は活して物は立す。
二三三〇　氣は神にして物は天なり、
二三三一　機は神にして跡は天なり、
二三三二　跡は成り物は成る、共に貌なり、
二三三三　機を發し跡を成す、共に狀なり、故に
二三三四　事なる者は、神の經通の間に爲す者なり、機を發し跡を收む、以て其の形を狀にす、
二三三五　物なる者は、體の緯塞の中に成る者なり、氣は活し物は立ち、以て其の物を貌にす、故に
二三三六ー三七　其の戸を開けば、則ち千狀萬貌は、畢く其の路に上り、流れに順いて往く、
二三三八　來たる者に會えば、則ち常定の天を成す、
二三三九ー四〇　其の宅に居れば、則ち爲成没露は、同じく其の室を閉じ、機に觸れて發す、
有する者を開けば、則ち變換の神爲す、

(PA 192)

(PA 193, I 409a)

神物爲成圖

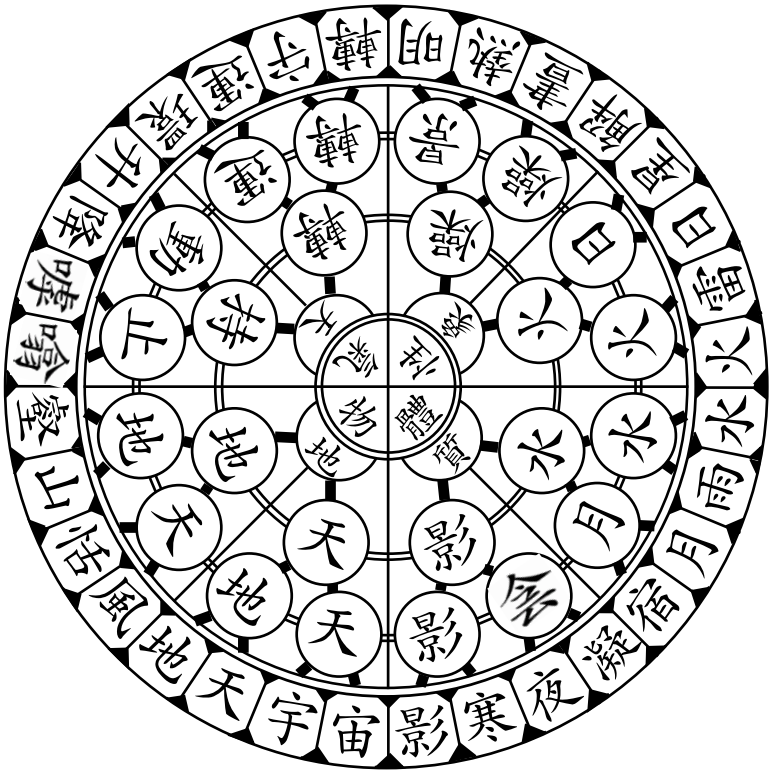


天地爲成圖一合

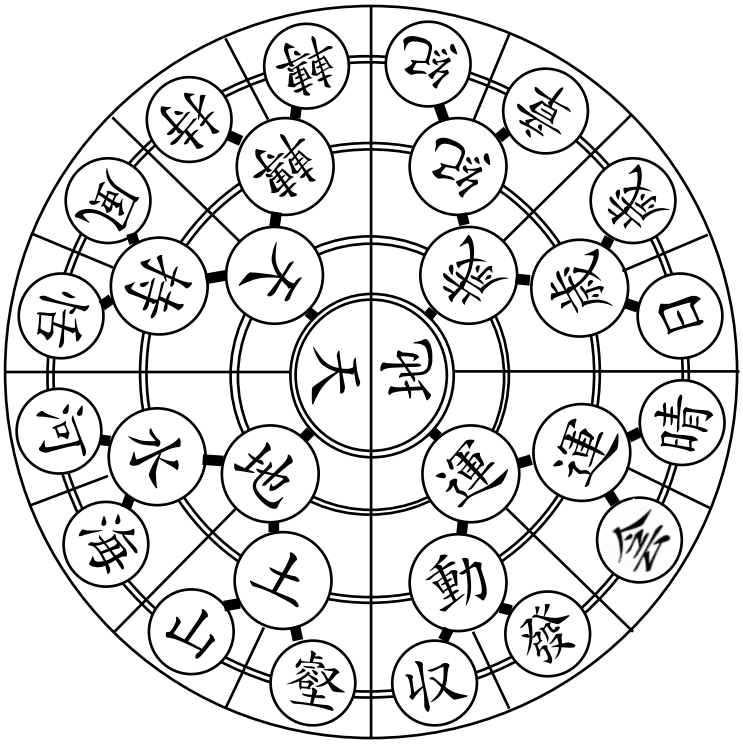
天
本神
神明
事物
天命
貌道
天神
德道
觸用
變化
用生
本神
神明
事物
貌道
德道
觸用
變化
用生
天
精氣神
德合無形
一物一沒
四三露氣
一二四三
隱體見性
居宅上路
四三業生
體示來言
氣路於表

地
非静動
動静非
静動非
非動静
動静非
静非動
非静動
動静非
静動非
非動静
動静非
静非動
水
空
風
火
地
形
持
轉
轉
持
形
地
火
風
空
水
象
通
塞
塞
通
象
方
位
方
位

天地象質成之圖


天地象質成之圖
體質
影地
影天
天地
地天
地天
天地
影天
影地
天地
地天
地天
天地
影天
影地
天地
地天
地天
天地
影天
影地

歲運轉持成之圖



事物

一者は痕　無し、
剖析は痕を著す、
痕　著れて而して物は露す、
物　露して而して貌は成る、　貌の成るは則ち天地の成功なり。
蓋し其の痕を著し物を露す。以て此の如き者を有す、
　以て此の如き者を立す、此の如き者は。必ず隻立せず。
必ず其の反を得て偶す。故に。露中は、則ち氣は没し物は露す、性は隠れ體は見る、
　没中は、則ち物は没し氣は露す、性は見れ體は隠る
蓋し氣の物を開く。一よりして二なり。
二　分れて相い隔つれば、則ち一は移りて二に居る、
二　交りて相い合すれば、則ち二　融して一を成す、故に。
一にして二を有すれば、則ち全中に偏を有す、
一中に隻を雙ぶれば、則ち一は能く二に移る　故に
箇箇は。能く隻中に自から偶す、
　偏中は自から全す、
是に於て。一毫を擧げて、而して天地に遺す無し、
天地を擧げて、而して一隻に觀る有り

二三四八
二三四九
二三五〇
二三五一－五二
二三五三－五四
二三五五－五六
二三五七－六〇
二三六一－六三
二三六四－六五
二三六六－六七
二三六八－六九
二三七〇－七一
二三七二－七三
二三七四
二三七五
二三七六
二三七七

二三七八ー七九　夫れ剖對なる者は。經緯なり。剖すれば則ち對す、
二三八〇　　分るれば則ち合す、
二三八一　彼此は相い織らざるを獲ざるなり。
二三八二　既已に彼此は相い織り。
二三八三ー八四　　正傍は更互す。親疏有り、
二三八五　　客主有り、
二三八六　相い繼ぐ有り、
二三八七　相い竝ぶ有り、
二三八八　箇箇は繼ぎて竝ぶ、
二三八九　氣氣は交錯す、
二三九〇　竟に其の氣を露す、
二三九一ー九二　　其の性を見す　蓋し物は各體を剖く。
二三九三　而して各物は各氣を有す。體は析ければ則ち氣は分る。氣は分れて而して物は小なり。
二三九四　之を派に分かつ、
二三九五ー九六　之を源に同くす、　故に物は。之を地の幹立に資る、　而して幹持は竝び立つ、
二三九七　　之を天の活爲に資る　而して活運は相い交る、
二三九八　分るれば則ち隔つ、　隔つれば則ち竝び立つ、
二三九九ー〇〇　合すれば則ち通ず　通ずれば則ち相い交る　是に於て。體體は相い接す、

氣氣は相い交る、
體體の竝び立つは、 廼ち物なり、
氣氣の相い交るは、 廼ち事なり、

(PA 202)

物は惟だ此の如し、 是れ之を貌と謂う、
氣は能く才を運す、 是れ之を狀と謂う、
物は能く其の體を露す、 而して其の貌を没す、
氣は能く其の性を隠す、 而して其の狀を見す、 是に於て。物は條理整齊の中に立つ、
事は各體紛雜の間に行わる、 (I 409b)

條理整齊する者は、 天成の定貌なり、
各體紛雜する者は、 神爲の變狀なり、
神は機を以て變ず、 人は其の變を測ること能わず、
其の主を贊して、 以て神と爲す、
其の態に名して、 以て妙と爲す、
天は跡を以て定る、 人は其の定を揜うこと能わず、
其の主を贊して、 以て天と爲す、
其の貌に名して、 以て誠と爲す、
機變の神爲は、 感應に就て、 而して其の性を認む、
跡定の天成は、 當遇を觀て、 而して其の體を認む、

二四二〇　經なる者は、神の遊ぶ所なり、而して
二四二一　緯なる者は、天の成る所なり、
二四二二　若し之を經緯の中に剖析すれば。則ち
二四二三　緯中。其の天は。物、本氣を以て立す、而して易わらず、
二四二四　　神、神氣を以て活す、而して定まらず、
二四二五　經中。神は、機、變じて測られず、
二四二六　　天は、跡、定りて揜われず、
二四二七　各物各形、
二四二八　各氣各態、
二四二九　各氣は各おの其の態を定む、
二四三〇　各活は各おの其の機を變ず、
二四三一　爲成は機を變ず、
二四三二　天神は態を定む、
二四三三　事物は、其の天地なり、
二四三四　機態は、其の天神なり、
二四三五　變とは何ぞ、天は常中に變す、
二四三六　　神は成中に爲す、
二四三七*　定とは何ぞ、天は動中に常す、

二四三八　神は爲中に成す、是を以て。
*二四三九　天は能く物を立し、神は能く天に於て體す、
二四四〇　天は物を立するを以て、而して
二四四一ー四二　天態は能く常し、物態は能く定る、
二四四三　神は能く氣を活す、氣は能く神に於て用す、
二四四四　神は氣を活するを以て、而して
二四四五ー四三　神態は能く變じ、物態は能く換る、
二四四七　天は成を以て其の道と爲す、
二四四八　神は爲を以て其の道と爲す、
二四四九　物なる者は、天成なり、
二四五〇　神なる者は、神爲なり、是を以て。
二四五一ー五二　中は止り外は靜す、而して地は定り天は定る、故に天は能く其の天を常にす、
二四五三　地は能く其の地を常にす、
二四五四　機は活し運は發す、而して神は變じ物は換る、故に神は能く其の神を變ず、蓋し
二四五五ー五七　其の常なる者も亦た變ず、變ずと雖も、而も始まる者は則ち終りて能く始まる、
二四五八　起こる者は則ち滅して又た起こる、
二四五九　變じて常中を出でず、
*二四六〇ー六二　其の變なる者も亦た定る、定ると雖も、而も逝く者は再び返らず、

化す者は復び蘇らず　是を以て。

各活は天中に運動すれば、則ち其の態は變ずと雖も　而も常中に居る、　(I 410a)
各體は神中に幹立すれば、則ち其の態は定ると雖も　而も變中に行わる、
之を小に言いて。以て之を大に徴するに。蓋し
身の身を爲す。惟だ我の一身のみ。

親子は愛を以て交る、　(PA 204)
男女は感を以て交る、
喜に於て笑う
憂に於て泣く、
酒には則ち酔う
舟には則ち注す、
餌には則ち能く肥ゆ
毒には則ち能く死す、
其の交る所の異なれば。則ち其の應ずる所は變ず。
故に天地は正反にして。散を以て結に偶す。而して
日地は正比、熱を以て寒に偶す、
日水は傍比　潤を以て乾に偶す、
日影は上に於て反して、明暗の偶する有り、

二四六三
二四六四
二四六五
二四六六
二四六七
二四六八
二四六九
二四七〇
二四七一
二四七二
二四七三
二四七四
二四七五
二四七六
二四七七
二四七八
二四七九
二四八〇

水燥は下に於て反して、滋煦の偶する有り、
交接の感應に從いて。而して
性の見るる所は同じからず。
又た之を聲味に言うに。
鐘鼓の懸、桴楹は同じく一物にして、而して洪纖は則ち其の叩に從う、
鼎鼐の設、水火は同じく一性にして、而して苦甘は則ち其の和に從う、故に
其の性は異なるに非ざれども。而も物に當りて狀を見す。
交る所に從いて。而して變化は同じからざるなり。是れ所謂
各物各形、
各氣各態、事物の條理整齊の中に於て紛擾錯雜する所なり。
山に艸木土石有り、人に飢寒疾病有り、相い得て溫飽藥毒有り、
物に聲色臭味有り、人に耳目鼻舌有り、相い得て視聽聞味有り、
絪縕感應し。變化千萬す。是を以て。
其の己を以て物に會うや。
父に會し子に會し。
君に會し臣に會し。
雨に會し日に會し。
夷に會し險に會す。

二四八一
二四八二
二四八三
二四八四
二四八五ー八六
二四八七ー八八
二四八九
二四九〇
二四九一
二四九二
二四九三ー九五
二四九六ー九八
二四九九
二五〇〇
*二五〇一
*二五〇二
*二五〇三
*二五〇四

*二五〇五　會して絪縕感應す。
*二五〇六　會を異にして才運は別す。是を以て。
*二五〇七ー〇八　各各境を分ち。天地を爲す所と異なるなり。是の故に。
二五〇九　陸物は水に死す、
二五一〇　水物は陸に死す、故に。
二五一一　鐵は、物を斫るに剛なり、而して鹽に接するに柔なり、
二五一二　水は、口に入るに柔なり、而して火を滅するに剛なり、
二五一三ー一四　是を以て。本と是れ一元の氣。一氣は其の性を活す、
二五一五　大物は其の體を立す、
二五一六　氣物は剖析す、
二五一七　體用は交接す、
二五一八　露する者は没す、
二五一九　没する者は露す、
二五二〇　物は各おの其の氣物を有すれば。
二五二一　則ち態は其の物に從いて異なるなり。
二五二二　異なると雖も而も常と變とを外にせず。
二五二三　常なる者は、天の態なり、
*二五二四　變なる者は、神の態なり、是に於て

機を活し能く變ず、
物の態は能く定る
物なる者は體なり。氣は其の體を用う。
各體は相い隔つ、
各氣は相い交る、
體體に接と曰う、
氣氣に交と曰う
各體は相い隔ち、自佗は客主を分つ、
各性は相い交り、剛柔は雌雄を分つ
體は相い隔たるを以て、而して接して交らず、故に
金石は相い入らず、
水火は能く相い滅す、
氣は相い通ずるを以て、而して交りて隔てず、故に
機形は能く相い容る、
聲色は互いに相い居る、
之を人に移して言わんに。手の器を執り、
足の地を踏み、
飲食の内に入り、

二五二五
二五二六
二五二七ー二八
二五二九
二五三〇
二五三一
二五三二
二五三三
二五三四
二五三五
二五三六
二五三七
二五三八
二五三九
二五四〇
二五四一ー四二
二五四三
二五四四

二五四五ー四六　衣服の外を被うは、共に體の接なり、
二五四七　憂喜の心を發し、
二五四八　愛憎の情を感じ、
二五四九　聲音の耳に於ると
二五五〇ー五一　文彩に目に於るは、皆な氣の交なり、
二五五二ー五四　氣物の交接。其の定度有る者は、則ち寒熱の冬夏を爲す、
二五五五　明暗の晝夜を爲す、
二五五六　誠に違う所莫し、
二五五七ー五八　其の定期無き者は、則ち突然として雷起り風生じ、
二五五九　倏乎として山崩れ海涌く、
*二五六〇　變に認むる所莫し。是の故に。
二五六一　勢の走る所、主は以て客を轉ず、
二五六二　機の變る所、雌は以て雄に勝る、
*二五六三　故に。動けば、則ち往來運轉す、
二五六四　止れば、則ち居止環守す、
二五六五　日月は轉に會すれば、則ち順逆交蝕の事有り、
二五六六ー六七　水陸は象に會すれば、則ち凝融開閉の事有り、故に。體は物の貌と成る、
二五六八　用は事の狀を爲す、

二五六九　事狀は神　之を用す、
二五七〇　物貌は天　之に體す、
二五七一　爲すに天神有り、
二五七二ー七三　成るに氣物有り、
二五七四ー七五　物は、則ち成りて而して其の體變せず、
二五七六　氣は、則ち成りて而して其の跡は定む、體に天地の成體有り、
二五七七ー七八　跡に天命の成跡有り、蓋し（PA 207）
二五七九ー八〇　爲すに神物有り。物は交りて而して其の事は變ず、
二五八一　神は通じて而して其の事は換る、換に造化の通氣有り、
二五八二　變に鬼神の活態有り、
二五八三　天地は物を坱坱として塞がるの中に成す、
二五八四　造化は事を衰衰として通ずるの中に爲す、
二五八五*　鬼神は氣物交接の變化を盡す、
二五八六ー八七　天命は往來當遇の成功を遂ぐ、是を以て。
二五八八*　氣物性體は。天物氣機を以て爲せば。則ち天地は物に成る、
二五八九　歲運は氣に成る、是の故に。
二五九〇　通塞は事を用す、
二五九一　宇宙は物に體す、
　　動止は事を用す、

(I 411a)

二五九二ー九三
*二五九四ー九五　一氣一物は。卽ち天地会易なり。轉持は物に體す、往く所皆な然るなり。故に。
二五九六　其の活は卽ち神なり、
二五九七　其の立は卽ち物なり、
二五九八　之を有するは卽ち天なり、
二五九九　之を發するは卽ち神なり、
二六〇〇　有するを以て而して物は體を立す、
*二六〇一　發するを以て而して氣は用を活す、
二六〇二ー〇三　體成りて而して物露す、
二六〇四　用成りて而して事露す、一剖けて而して各立つ。
*二六〇五　各の立を以て而して隔つ、
二六〇六　一の剖を以て而して通ず、故に。
二六〇七　天地は相い隔つ、
二六〇八　造化は相い通ず、
二六〇九　動植は相い隔つ、
二六一〇　生育は相い依る、
二六一一　隔を以て之を觀れば、則ち火は發して物を盡す、
二六一二　水は收めて物を生ず、
　通を以て之を觀れば、則ち火は水を以て立つ、

(PA 208)

水は火に由て存す、是を以て。
通ずれば、則ち天地萬物を、我と隔てず、
隔てれば、則ち耳目鼻舌を、各、其の用に隔つ、
故に。天地萬物の竝立するや、皆な其の隔たるを以てなり、
天地萬物の給資するや、皆な其の通ずるを以てなり、蓋し。
天なる者は、定常の宅なり、故に事は定まる、
地なる者は、變化の藪なり、故に事は變わる、
定常は則ち數を以て之を推す、
變化は則ち其の機は不測なり、
會違し親疏す、
順逆し成敗す、
大物は給う有り、
小物は資る有り、
資る者は、天地に遺さず、
給う者は、小に盡くさず、
植は、則ち冷止無意、堅剛竪立の生なり、
動は、則ち溫動有意、柔輭横動の生なり、
一一を平分す、

二六三一　予奪は相反す、而して我は則ち有意の境に遊ぶ。
二六三二　溫動の體、
二六三三　神靈の用、
二六三四　爲技は以て能く萬物に伸ぶ。
二六三五　是を以て。上下内外。前後左右。應酬　最も廣し。
二六三六　天行に曆す、
二六三七　人事に史す、
二六三八　守れば、則ち城郭宮室　衣服飲食、法度戒嚴なり、
二六三九　禦せば、則ち干戈兵革　祈禳鍼藥、關門藩鎭なり、
二六四〇　惡めば、則ち賊害殺奪なり、
二六四一　愛せば、則ち予活施譽なり、
二六四二　海を航り山には棧す、
二六四三　土を墾やし海に煮る、
二六四四　其の事は。則ち數の盡くす所に非ず。
二六四五　天有れば、則ち天命有り、
二六四六　神有れば、則ち感應有り、
二六四七　意匠は終に天人酬酢の事有り、
二六四八　物有れば、則ち通隔有り、

二六四九　事有れば、則ち開閉有り、
二六五〇　意匠は能く信否奉覆の事有り、是を以て。
二六五一　定常の宅、誠は其の中に旺す、
二六五二　變化の藪、神は其の中に旺す、
*二六五三　各各の剖析する所。條理井然たりと雖も。　(I 411b)
*二六五四　彼此の交接する所。運爲變錯を致す。
二六五五　剖析は體性を條理に於て成す、
二六五六　交接は事物を變錯に於て成す、
二六五七　藁は本と艸中の一種。
二六五八　鹽は亦た水中の一味。
二六五九　水鼠は水蟲。
二六六〇　蛞蝓は陸蟲。
二六六一　條理は自から其の分有り。而して
二六六二　水鼠は藁を見れば則ち藁　水鼠に勝りて流る、
二六六三　蛞蝓は鹽を見れば則ち　爛る、
二六六四　各性は感應し。雌雄は相い分る。夫れ
二六六五　物は立ち神は運し。事は會違を有す。
二六六六―六七　今姑く之を日に言うに。月と會違するに當りては、則ち明晦　事を爲す、　(PA 210)

二六六八　水物は其の事に随いて、以て盛衰を爲す、
二六六九　地と會違するに當りては、則ち照蔽　事を爲す、
二六七〇　陸物は其の事に随いて、以て動息を爲す、
二六七一　氷は以て此に澌く、
二六七二　水は以て此に涸る、
二六七三　膏は以て此に融く、
二六七四　肉は以て此に壞す、
二六七五　彼此錯雜し。千萬變狀す。是を以て。
二六七六　人は遇する所の夷險順逆に随いて。
二六七七　絪縕は以て喜怒憂樂し。千萬の變狀を出だす。是に於て。
二六七八ー七九　酬醋黜陟の間に。殺活予奪の事有り。是を以て。又。
二六八〇　雨に遇いて、而して後其の事は雨に接するに千萬なり、
二六八一　風に遇いて、而して後其の事は風に交わるに千萬なり、是を以て。
二六八二　物は條理を以て立す、
二六八三*　事は運爲を以て變ず、故に。
二六八四　事を以て物を觀れば、運爲變錯は、條理整齊の中に在り、
二六八五　物を以て事を觀れば、條理整齊は、運爲變錯の中に在り、是を以て。
二六八六　條理整齊の中、亦た自から天地有り、

二六八七　運爲變錯の中　亦た自から天地有り、

二六八八　一徳は彼此に融す、

二六八九ー九〇　二徳は彼此に通ず　是に於て。爲は則ち一氣の業なり、成は則ち大物の功なり、

二六九一　業立ち功成りて。狀貌没露す。

二六九二　一分、

二六九三　一合、

二六九四　合せざれば則ち分れず、

二六九五　分れざれば則ち合せず、

二六九六　会に非ざれば則ち易に合すること能わず　而して会は則ち易と反す、

二六九七　地に非ざれば則ち天に合すること能わず　而して地は則ち天と反す、

二六九八　合する者は則ち一なり、

二六九九　分れる者は則ち二なり、

二七〇〇　分るれば則ち彼此は相い隔つ、

二七〇一*　二なれば則ち彼此は相い隔つ、

二七〇二　蓋し一大全物の中。成具は、則ち竝び立ちて天地を成す、

二七〇三ー〇四　萬物は、則ち竝び成りて天地を立す、

二七〇五　是を以て。成具は、一有を分ちて、彼此を對す、

二七〇六

(PA 211)

(I 412a)

二七〇七　萬物は、一有に資りて、彼此を對す、
*二七〇八　是の故に。剖析の道は。一は一一を剖く。一は能く二に移る。
二七〇九　一は能く二に移れば。則ち末猶お本のごとし。
二七一〇　末猶お本のごときを以て。剖析は盡きる所を見ず。是を以て。
二七一一ー一二　體は析して彼此は分る。彼此の體は隔つ、
二七一三　彼此の氣は反す、
二七一四　反を以て而して合す、
二七一五　隔を以て而して通ず、
二七一六ー一七　彼此は相い立す。各おの其の氣を活す。是の故に。
二七一八　一中に竝び立つ者は。各おの其の氣物を活立す。
*二七一九　偶を得て而して相い合す、
二七二〇　與を得て　相い伴う、
二七二一　紛紛擾擾。共に其の間に居行すれば。則ち一の交接せざる無し。
二七二二　接は客主を有す。
二七二三　交は雌雄を有す。
二七二四　此に客なる者は、彼に主なり、
二七二五　此に雄なる者は、彼に雌なり、
二七二六　本は彼此の體を立す、

二七二七
二七二八
二七二九
二七三〇
二七三一
*二七三二
二七三三
二七三四
二七三五ー三七
二七三八
二七三九ー四〇
*二七四一
二七四二
二七四三
*二七四四
二七四五ー四六
二七四七
二七四八

神は交接の用を活す、
其の體は則ち物なり、
其の用は則ち事なり、
各體は各才を運す。
與と偶と。同じく相い交接す。是れ之を事物と謂う。
蓋し。條理は。經緯なり。交接は以て之を織る。
其の物の體を立てて、
事の跡を收める者は、
經緯は相い織りて。狻猊鵷鸞。華卉烟霞。以て錦文を成すなり。
是を以て。物は各自に其の體を立て。
其の用を行えば。則ち立つ者は相い群る。
行う者は相い交る。是を以て。
剖析して、而して各氣各物、井然として整齊たり、
交接して、而して各事各物、雜然として文を爲す、
蓋し。各物は各の體性す、
各才は相い發接す、是に於て。米麴の才は酒を釀す、
金石の才は火を生ず、
水は寒に遇いて、而して氷雪を結ぶ、

燥は熱を鬱して、而して雷霆を激す、是を以て。
山島湖澤は、水土相い接するよりして成る、
雲煙雨露は、水燥相い交わるよりして起る、
交接すれば。則ち隔通は反合す。
感應は以て絪縕す。
動植の成具の中に成る所にして。而して
其の雑糅は。條理の結ぶ所なり。
絪縕の態。時通は塞がる者を率ゆ、
　處塞は通ずる者を容る、
地質は止りて而して天氣を轉ず、
天氣は轉じて而して地質を持す、
火は地の会澤を喩う、
水は天の昜華を喩う、
牡は能く牝に給す、
子は能く母に資る、
此れは則ち。物の偶を得て而して其の用を行うなり。
金にして人に遇うや、水火の煉淬を歴て、而して木を斫り石を穿つ、
麻にして人に遇うや、績縷の事を歴て、而して人に衣し魚に網す、

(PA 212)

(I 412b)

二七四九
二七五〇
二七五一
二七五二
二七五三
*二七五四
*二七五五
二七五六
二七五七
二七五八
二七五九
二七六〇
二七六一
二七六二
二七六三
*二七六四
二七六五
二七六六

*二七六七　此れは則ち。物の與を得て而して其の用を爲すなり、
*二七六八　蓋し其の性の類する者は相い親しむ、狗は人門を守り　鷄は鶩卵に伏す、
*二七六九　性の反する者は相い疏んず、蛞蝓は蛇に伏し、磽石は鼠を殺す　是の故に。
*二七七〇　日月星辰なる者は、物の　各　天に立するなり、
二七七一　各體各行、循環は期を爲し、會違は時に變ず、
*二七七二　山川水火なる者は、物の　各　地に立するなり、
二七七三　各體各立、交接は事を爲し、感應は體を運す、
二七七四－七六　是に於て。亦た絪縕は物を化す。保營は物を護る。故に地日は晝夜を爲す、
　日月は朔望を爲す、
二七七七　地物は日に交りて、而して肅舒の事有り、
二七七八　水物は月に交りて、而して盈虛の事有り、
二七七九　艸木は日に遇いて、而して華葉子苗を事す、
*二七八〇　鳥獸は日に遇いて、而して孳尾氄毛を事す、
*二七八一　故に物は。偶に會えば則ち偶に於て事す、
*二七八二　與に會えば則ち與に於て事す、
*二七八三　其の間に絪縕せざる靡し。
二七八四　夫れ物は已に　各　其の物を成す。
二七八五　物　成りて而して此に已すれば。則ち此は主を爲す。
二七八六－八七

二七八八　　佗は客を爲す。己れ已に成る有れば。

二七八九　則ち天地は大と雖も。

*二七九〇　　萬物は衆と雖も。己を此に成す有れば。

二七九一　則ち之を合して己と主客の勢を張るなり。

二七九二　張れば則ち一彼一此なり。

二七九三　一彼一此は。分れて其の勢を張ると雖も。而も

二七九四　彼は則ち大衆なり、

二七九五　此は則ち小孤なり、

二七九六ー九七　小にして且つ孤なりと雖も。而も衆大に應ずるに乏しからず。

二七九八　故に物は他物に遇う毎に。能く其の物と對して。而して感應絪縕す。

二七九九　其の間に爲す有るなり。是に於て。

二八〇〇　各物は　各　體性す。各才は感應絪縕す。

二八〇一　夫れ物は已に　各　其の體を立つ。　各　其の才を發す。

二八〇二ー〇三　反と無く與と無く。偕に能く感應絪縕する者は。

二八〇四　同じく一に於て有せらるるを以てなり。

二八〇五　知は通ずれば則ち感應す。

二八〇六　氣は同異を等くす。

二八〇七　才は能拙を區にす。

(I 412b)

雌雄の向背。交接は益ます廣し。
*二八〇九 其の事は　益　無窮なり。條理の正を著にせず。
二八一〇 錦文は狻猊鵷鸞。華卉煙霞に絢爛として。而して
二八一一 經緯の巧。其の中に隠隠たるに等しきなり。
*二八一二 姑く之を人に移すに。己れ已に此の天地を成すに。
二八一三 大物の洪曠。
二八一四 萬物の紛擾。
二八一五 佗を己に爲して。而して己と二を爲すなり。
二八一六 大物よりすれば。則ち動植は天地の中に竝立す。
二八一七 植は本氣に資る、而して體に立する者多し、
二八一八 動は神氣に資る、而して氣に立する者多し
二八一九 人なる者は。動中の一物なり。
二八二〇 意爲の巧を以て。天地の情を髣髴に觀る。故に。
二八二一 其の物を二にして、人物と曰う、
二八二二 其の氣を二にして、天人と曰う、
二八二三 是に於て。己能く物と勢を張る。
二八二四 我と勢を張る者を取りて。
*二八二五 以て己の用と爲す。則ち

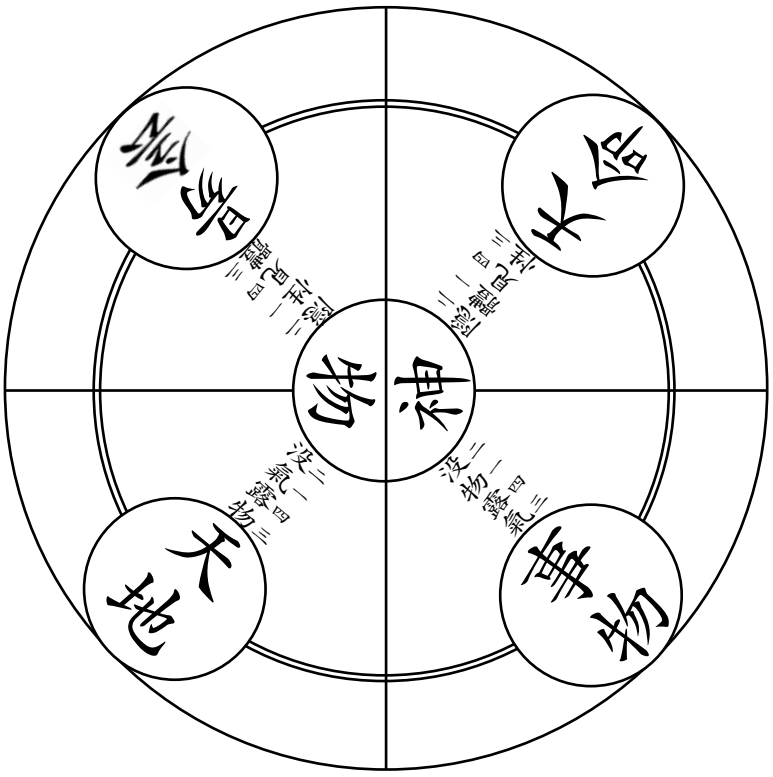
二*八二六　物を皆な己の有と爲す。故に。
二八二七　日月星辰を暦象す、
二八二八　山原河海を疆域す、
二八二九ー三〇　死生通塞に資り、而して殺活予奪に施す、
二八三一ー三二　保營奉役に資り、而して服食使令を設く、
二八三三　天は則ち爲の痕を露せず、
二八三四　人は則ち諸を心思に運す、諸を言行に施す、
二*八三五　故に衮衮の通に値えば、則ち漏を置き表を立つ、
二*八三六　坱坱の塞に値えば、則ち方を建て位を定む、
二八三七　理を觀て道を建つ、
二八三八　居に由り徳を成す、
二*八三九　榮茂に時なって耕耘正し、
二*八四〇　方穎を相して收穫を爲す、
二八四一　土石の結を察し、造化を竊んで陶瓦を造る、
二八四二　滋味の成を考え、絪縕を假りて酒醴を釀す、
二八四三　是を以て。其の遇する所は。遠ければ則ち水火動植なり。
二八四四　近ければ則ち君臣父子なり。
二八四五　勢力を轉じて、而して權柄を爲す、

二八四六　知通を修めて、而して禮教を爲す、
二八四七　各各は本と隔體なり。
二八四八　隔體は本と一有なり。
二八四九　隔たれば則ち通ぜず、
二八五〇　一なれば則ち隔てず、是を以て。
二八五一　通ずれば則ち天地は一を爲す、
二八五二　隔たれば則ち目は背を視ず、
二八五三　隔は本と粲立の狀なり、
二八五四　一は是れ混成の體なり、
二八五五　人は人の地に偏立して。
二八五六　意爲の能を以て。
二八五七　意爲の祟を受く。
二八五八　隔たれば則ち通ぜず、
二八五九　合すれば則ち相い淆る、是を以て。
二八六〇　體は通じて天地と一に融す、
二八六一　執は隔ちて天地と間を爲す、
*二八六二　之を心思に旋せば、則ち悟惑す、
*二八六三－六四　之を設施に旋せば、則ち慕斁す、是を以て。物は條理に随いて分る、

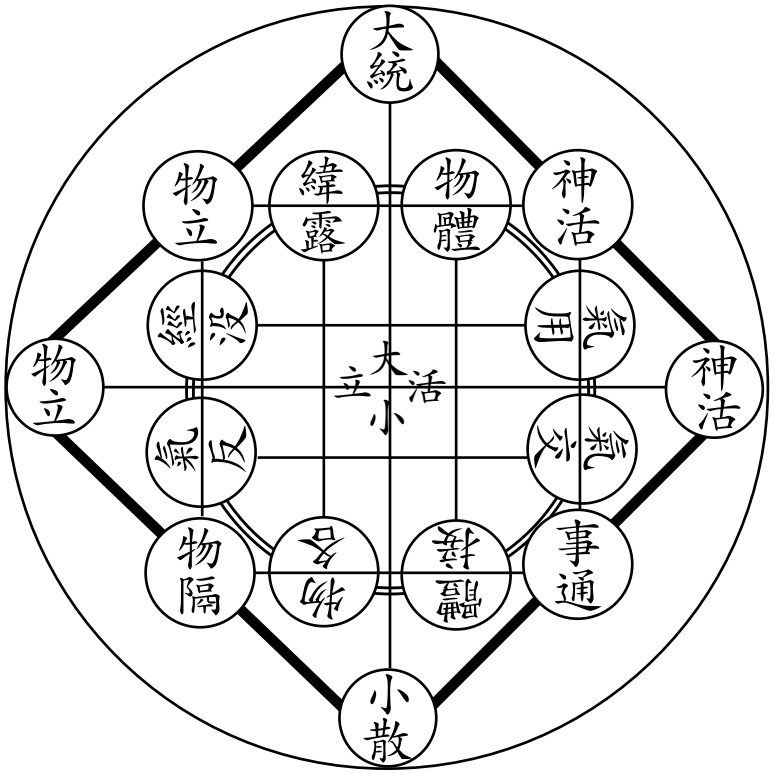
二八六五　事は交接を以って合す、
二八六六　偶を以て合する者は、其の素より合する者を合す、
二八六七　與を以て合する者は、其の素より分るる者を合す、
二八六八　故に錯雜變化す。事は物より多し。
二八六九　與と雖も而も相い合すれば。則ち彼此の體性は。感應絪縕す。
二八七〇　猶お天地の感應絪縕に反合するがごとし。

(PA 215, I 413b)

図名なし

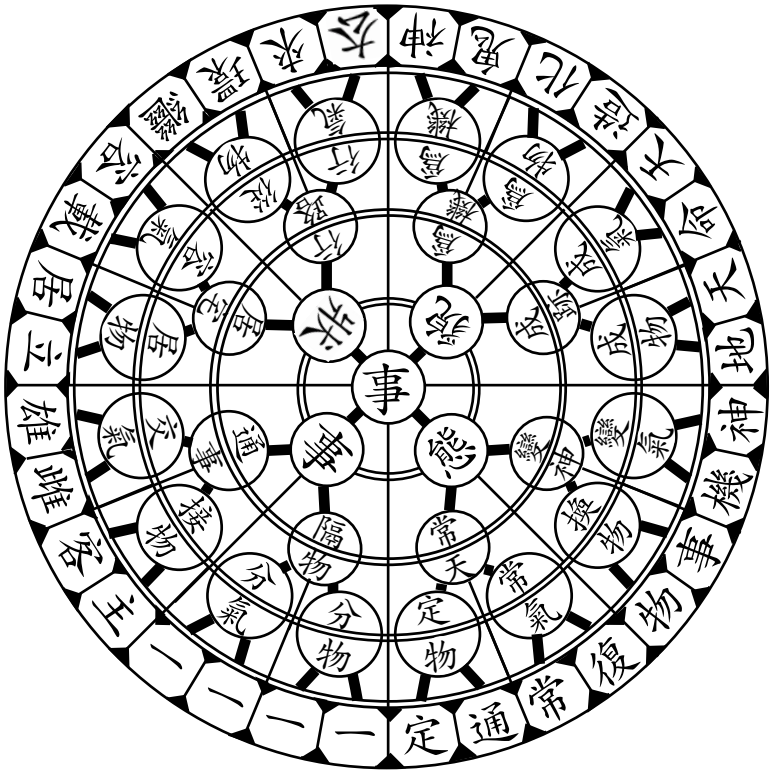


事通物隔圖



図名なし

図名なし


事
定
通
常
復
物
事
機
神
地
天
原
大
冷
化
鬼
神
太
水
雲
露
霧
谷
巽
居
宮
坤
雄
雌
客
主
二
一
一
一
定
通
常
復
物
事
機
神
地
天
原
大
冷
化
鬼
神
太
水
雲
露
霧
谷
巽
居
宮
坤
雄
雌
客
主
二
一
一
一

二八七五
二八七六
二八七七
二八七八
二八七九
二八八〇
二八八一
二八八二
二八八三
二八八四
二八八五
二八八六
二八八七
二八八八
二八八九
二八九〇―九一
二八九二

天命

運爲の狀は、廼ち一氣の業なり、
幹立の貌は、廼ち大物の功なり、
體なる者は、二を成する者にして、條理整齊す、
性なる者は、一を成する者にして、通隔紛雜す、
紛雜を以て、而して條理整齊の體を隱す、
整齊を以て、而して通隔紛雜の用を見す　是を以て。
神は經に爲し、變化は此に路を假る、
天は緯に成り、定常は此に宅を占む、
爲中は、則ち機發變化し、跡收定常す、
成中は、則ち物露立體し、物沒成貌す、
體貌成立、以て天を觀る、
變化定常、以て命を立つ、故に
天命なる者は。一氣の所業なり、
大物の成功なり、是の故に。
氣物は成りて而して天地は立す、
一一は立ちて而して會易は成る、是に於て。天は其の動を定む、而して運轉環守す、
地は其の靜を定む、而して虛實覆載す、

(PA 221)

二八九三　会易は物を成し、日月水火し、文章絪縕し、動植は其の間に成り、天の物を立つるなり、
二八九四　經緯は分れて而して往來成る、
*二八九五ー九六　各各は運して而して當遇定る、經は其の行を變ず、而して往來生化す、
二八九七　緯は其の居を變ず、而して將迎會違す、
二八九八　各各は當遇し、消長失得し、神靈活運し、體跡は其の間に定り、命の跡を收むるなり、
二八九九　是を以て天命の成る所。各各竝び立つ。氣物相い交る。
二九〇〇　之を分てば。則ち氣物相い交る、廼ち其の事なり、
二九〇一　性才相い運ぶ、廼ち其の態なり、
*二九〇二　神爲の機を將來に於て變化する者は、廼ち其の狀なり、
*二九〇三　天成の跡を既往に於て定止する者は、廼ち其の貌なり、是を以て。
二九〇四　狀は變化測る無しと雖も。終に貌の本然に立つ。
二九〇五　本然は則ち一有の德なり。能く自と使との然を有す。故に
二九〇六ー〇七　物は其の體に非ざる莫し。而して其の體は、天地に塞りて、天地に盡きず、
二九〇八　往來に通じて、往來に盡きず、
二九〇九　目に充ちて、而して視る可からず、
二九一〇　耳に盈ちて、而して聽く可からず、
二九一一　之を無測に變ずるも、亦た此の如し、
二九一二　之を不揜に定むるも、亦た此の如し、

(PA 222)

此の如きにして而して後。物體　立つ。
蓋し往來なる者は。當遇の成る所なり。
　命の立つ所なり。
命中。之を分てば。當は則ち天なり、
　遇は則ち命なり、
機は來りて窮まらず、
跡は定りて揜われず、
各神各體は。往來交接し。向背會違す。常變は一ならず。是の故に。
時處は通塞す。
運轉は升降す。
反偶の絪縕と、
與偶の感應とは、
往來せざる者有ること莫し。
往けば則ち必ず遇う、
來れば則ち必ず當る、
當れば則ち天なり、
遇えば則ち地なり、
天當は避く可からず、
　故に天の名有り、

(I 414a)

二九三二 地遇は従いて受けざるを獲ず、故に命の名有り、蓋し
二九三三 處する者は、地なり、
二九三四 來たる者は、時なり、
二九三五 來たる者は、去る、
二九三六 處する者は、往く、
二九三七 來れば則ち當る、
二九三八 往けば則ち遇う、故に。
二九三九 來當は時なり、成るに就きて天と爲す、
二九四〇 處遇は地なり、受るに由りて命と爲す、
二九四一 成る者は、天なり、
二九四二 處する者は地なり、故に
二九四三 成と處は亦た天と地なり、故に。
二九四四 日月旋轉する者は、成中に爲を有すなり、
二九四五 晝夜冬夏する者は、爲中に成を有すなり、故に。
二九四六 殺活予奪は、人の爲なり、
二九四七 死生窮達は、天の成なり、是に於て。
二九四八―四九 天命の當遇は。天人一なり。往きて遇う、
二九五〇―五二 來りて當る、神靈の用、見わる。生化天命の事を成す。 (PA 223)

二九五三　生化は、往來なり、神の運用する所は、機す、跡す、

二九五四　天命は、當遇なり、天の成立する所は、通す、塞す、

二九五五　之を合して罅縫無し、

二九五六　之を分ちて條理有り、

二九五七ー五八　條理有るを以て。其の本は。體なり、性なり、

二九五九　氣なり、物なり、是に於て。

二九六〇　各物は各の體性す、

二九六一　各氣は相い發接す、是に於て。

二九六二　氣は事を爲す、

二九六三　物は物を爲す、

二九六四　事に往來有り、

二九六五　物に天命有り、

二九六六　當に順逆有り、

二九六七　遇に會違有り、

二九六八　神は往來を爲す、

二九六九　天は當遇に成る、

二九七〇　往けば則ち遇う、

二九七一　來れば則ち當る、然りと雖も。

二九七二　往來は當遇と同じからざるなり。蓋し
二九七三　萬の事物は。　神爲に非ざる莫し。
二九七四　神の爲す所は。天收に非ざる莫し。
二九七五　言の人事に於ける。越人の胡に之き。胡人の越に之くが如し。
二九七六　蓋し其の之くや。各神の爲なり。
二九七七　而して其の會違は則ち神爲に非ざるなり。是を以て。
二九七八　一なる者は精なり。而して其の神は未だ窺う可からざるなり。
二九七九　一一は剖對す。各神は各おの相い用す。是の故に。
二九八〇　氣は轉じ象は運す、而して東西南北を成す、
二九八一　日は動き影は追う、而して晝夜冬夏を成す、
二九八二　東西は日月を得て、而して歲月を成す
二九八三　拗突は水燥を得て、而して水陸を成す
二九八四　氣象は上に鼓す、
二九八五　氣質は下に應ず、
二九八六　而して動植の榮枯啓蟄は。其の中に成る。
二九八七*　故に人は。善惡に悦怨を成す、
二九八八　　是非に榮辱を成す、是の故に。
二九八九　活運變化は。其の績に非ざる者無しと雖も。而も

(I 414b)

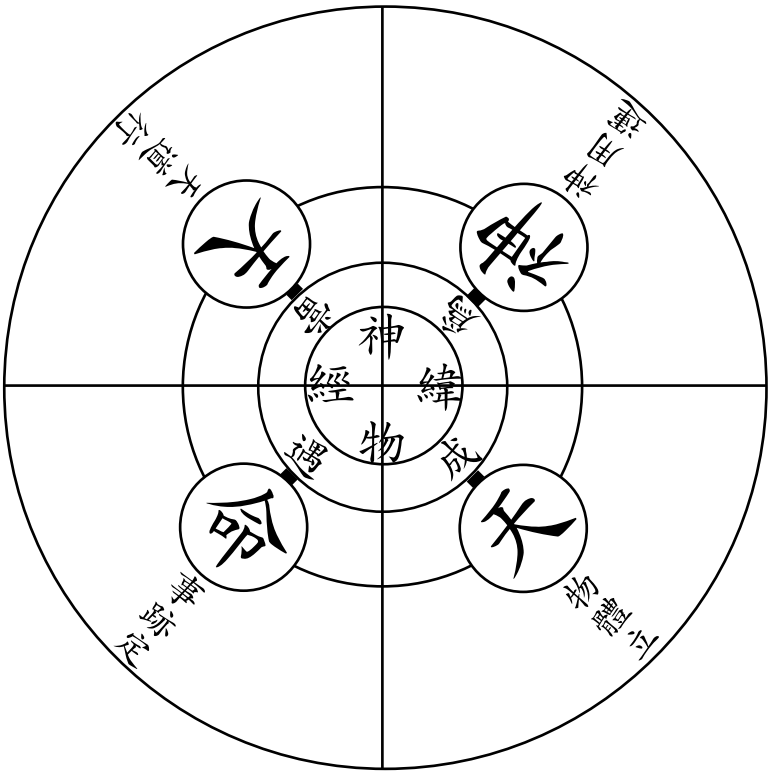
其の功を成す者に至りては。則ち神は與らざるなり。
大なる哉。天の道爲るは。
神は變化の妙を盡くして。而して其の功を收む。
無爲にして成る。氣も亦た天中に居る。
且つ人は一小氣物を以て。
精大天地に臨む。
動輒すれば神爲の妙に眩む、
天成の誠に瞽し、
神は往來す、而して
天は當遇す、
往來せざれば。則ち當遇する所無しと雖も。
其の天成は。神爲與らず。
神爲與らずして。而して氣も亦た天中に居るを觀る。
當遇は痕を著して。天も亦た神と伍を爲すを觀る。
天は神と伍を爲して。而して氣用の行わるるを觀る。蓋し
人の境を開くや。意を執りて作を事とす。
其の氣を爲すや麁なり、
其の物を爲すや小なり、

二九九〇
二九九一
二九九二
二九九三
二九九四
二九九五
二九九六
二九九七
二九九八
二九九九
三〇〇〇
三〇〇一
三〇〇二ー〇三
三〇〇四
三〇〇五
三〇〇六
三〇〇七
三〇〇八

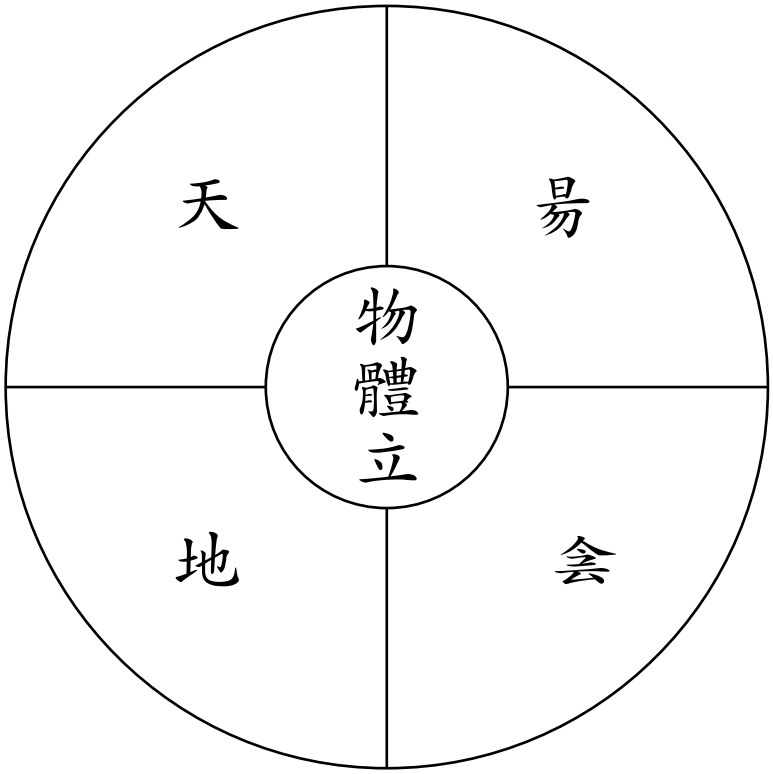
三〇〇九　麁小を執りて、
三〇一〇　精大を窺い、
三〇一一　己に有するの爲技を以て、
三〇一二　我に非ざるの天命を弄す、
三〇一三　頑囂は崇を爲す者多し。故に。
三〇一四　物體は立ち、事狀は定る、
三〇一五　往來は爲し、當遇は成る、
三〇一六　能く此に達せずんば。天地に肖ずと言わんも。可なり。

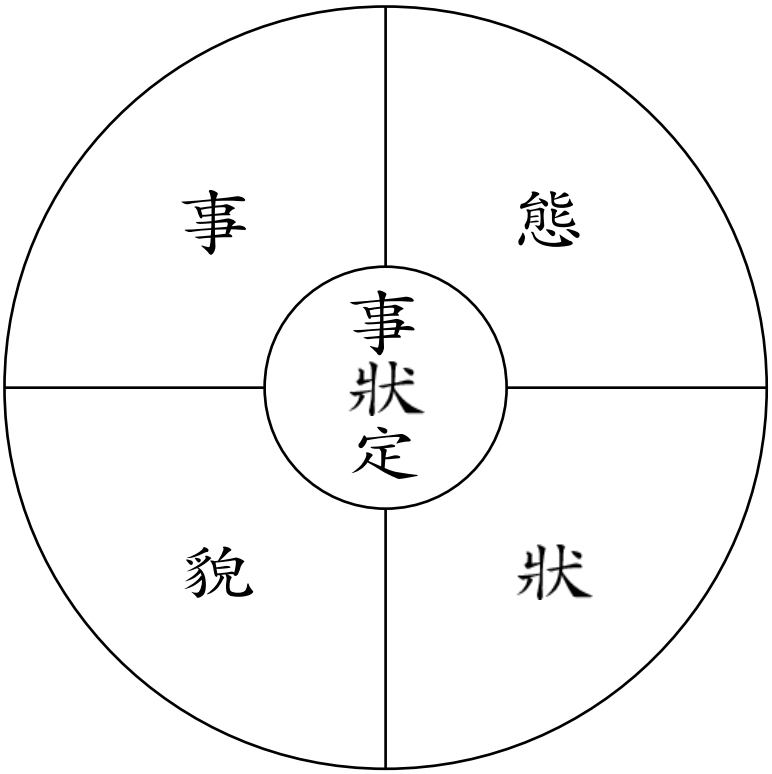
(PA 225, I 415a)

天命圖



體立狀定圖一合




事
態
事狀定
貌
狀

天行地居圖

神運體立圖